[資料・批評]

2015年アート・クリティック活動の報告

演劇研究グループ
編集委員：酒井正志、安藤隆之、玉崎紀子、服部厚子

はじめに

「演劇研究グループ」が月1回のペースで開催している「アート・クリティック」の活動を報告する。研究の基礎的な作業として始めたこの活動は今年6年目を迎えた。

今年も名古屋を中心に、東海地方の各地をはじめ、東京、大阪、滋賀、兵庫にまで足を運んで、演劇、オペラ、ミュージカル、歌舞伎、能、浄瑠璃などの上演を鑑賞し、研究所で開く「アート・クリティック」でそれぞれの上演の批評を語り合った。近年、イギリスのナショナル・シアターやロイヤル・シェイクスピア・シアターなどで上演された劇やミュージカルを日本に居ながらにして映画館で観ることができるようになった。数年前から、メトロポリタン・オペラ・ハウスで上演されるオペラを名古屋の映画館でライヴ・ヴューイングとして観ることもできる。そこで鑑賞した作品も「アート・クリティック」で取り上げた。批評の対象となった作品数は129に上る。その中から、『白墨の輪』(こんにゃく座)、『完熟リチャードⅢ』(柿食う客)、『フィガロの結婚～庭師は見た！』(全国共同プロジェクト)、『トロイラスとクレシダ』(世田谷パブリックシアター・文学座・兵庫県立芸術文化センター共同企画)、『Top Hat』(イギリスからの来日公演)、『おふくろ』(劇団みどり)の6作品の短評をここに掲載した。さらに、3名の所員、準所員がロンドン(チチェスター、ストラットフォード・アポン・エイヴォン)での演劇とミュージカルの踏査を行い、その結果を、「アート・クリティック」と「研究例会」で報告した。3つの論考としてここに掲載した。

この活動が「演劇研究グループ」の研究の深化に寄与することを願っている。

(酒井正志　記)

Ⅰ．2015 年アート・クリティック活動の報告

2015 年アート・クリティック例会において報告された観劇演目のリスト。ほぼ日付順に通し番号をつけて以下に記載する。ただし 2014 年 12 月に観劇したもので、2015 年 1 月に報告された演目も以下に掲載する。

①ミュージカル『モーツァルト！』（クンツェ＆リーヴァイ作　山崎育三郎主演）　1 月 5 日㈪　12：00～　梅田芸術劇場　（磯貝）

②コンサート『ウィーン・フォルクス・オパー・新年コンサート』1 月 9 日㈮　18：45～　愛知県芸術劇場コンサートホール　（玉崎）

③演劇『海をゆく者』（栗山民也演出）　1 月 10 日㈯　14：00～　穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 主ホール　（伊藤）

④演劇『ショーシャンクの空の下に』（白井晃演出・ロンドン版）　1 月 11 日㈰　12：00～　名鉄ホール　（伊藤）

⑤コンサート『ウィーン＆ベルリン・コンサート　マスターズシリーズ』（第 1 回樫本大進＆エリック・ル・サージュ）　1 月 11 日㈰　15：00～　豊田市コンサートホール　（塹江）

⑥オペラ『天国と地獄』（大勝秀也指揮・中村敬一演出　びわ湖ホール声楽アンサンブル）　1 月 12 日㈪　14：00～　びわ湖ホール　（塹江）

⑦ミュージカル『ヴェローナの二紳士』（宮本亜門演出）　1 月 17 日㈯　13：00～　愛知県芸術劇場大ホール　（服部・玉崎）

⑧コンサート『ウィーン＆ベルリン・コンサート　マスターズシリーズ』（第 2 回ライナー・ホーネック＆児玉桃）　1 月 18 日㈰　15：00～　豊田市コンサートホール　（塹江）

⑨ミュージカル『楽園』（スイセイ・ミュージカル）　1 月 21 日㈬　18：15～　四日市市民会館　（服部）

⑩ミュージカル・ライブ『ビリー・エリオット』（邦画題名「リトル・ダンサー」）（ヴィクトリア・パレス劇場 2014 年公演録画　演出 Stephen Daldry）　1 月 22 日㈭　12：30～16：00　TOHO シ

ネマズ名古屋ベイシティ　(服部・玉崎紫・玉崎)

⑪MET ライブ・ビューイング『セヴィリアの理髪師』1 月 24 日㈭～30 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　シネマ　(塹江（1/26))

⑫ナショナルシアター・ライブ『ジ・オーディエンス The Audience』(Peter Morgan 作・Stephen Daldry 演出)　1 月 28 日㈬　20：10～　TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　(伊藤)

⑬コンサート『森麻季＆横山幸雄　デュオ・リサイタル』1 月 31 日㈯　15：00～　川越町あいあいホール　(服部)

⑭シネマ歌舞伎『二人藤娘＆日本振袖始　大蛇退治』(坂東玉三郎・中村七之助・中村勘三郎主演 2014 年公演録画)　2 月 1 日㈰　11：50～　MOVIX 三好　(玉崎紫・玉崎)

⑮映画『ANNIE アニー』(1977 初演舞台の再映画化)　2 月 1 日㈰　15：30～　MOVIX 三好　(玉崎紫・玉崎)

⑯演劇『マーキュリー・ファー』(フィリップ・リドリー作　日本初演・白井晃演出)　2 月 7 日㈯　13：00～　世田谷パブリック・シアター、シアター・トラム　(服部)

⑰ミュージカル『ボンベイ・ドリームズ』(シェーカル・カプール＆A.ロイド＝ウエッバー原案・萩田浩一演出・浦井健治主演)　2 月 7 日㈯　17：00～　東京国際フォーラム ホール C ・ 2 月 14 日㈯　12：00～　梅田芸術劇場メインホール　(服部（2 /7)・玉崎紫・玉崎（2/14))

⑱オペラ『白墨の輪』(オペラシアターこんにゃく座　ブレヒト原作・林光作曲・坂手洋二演出)　2 月 8 日㈰　11：00～　世田谷パブリックシアター　(服部)

⑲「世界劇場会議国際フォーラム 2015」報告　2 月 13 日㈮　12：00～　可児市文化創造センター　(服部)

⑳演劇『ペリクリーズ』(カトケン・シェイクスピア劇場・加藤健一事務所　鵜山仁演出)　2 月 20 日㈮～ ・ 3 月 1 日㈰　本多劇場　(伊藤（2/20 19：00)・服部（3/1 14：00))

㉑宝塚『風とともに去りぬ』　2 月 8 日㈬　12：00～ ・ 2 月 25 日㈬　16：30～　中日劇場　(磯貝)

㉒演劇『ハムレット』(SPAC 中高生観賞事業 宮城聰演出)　2 月 21 日㈮　16：00～　静岡芸術劇場
(服部)

㉓ミュージカル『ライト・イン・ピアッツァ』(名古屋市文化振興事業団企画公演・寺崎秀臣台本＆演出・小島岳志指揮・小島真砂世振付)　2 月 20 日㈮～22 日㈰　名古屋市青少年文化センター・アートピアホール　(服部 (2/20 18：30)・玉崎・磯貝 (2/21 16：00))

㉔演劇『マクベス』(ピッコロシアター・プロデュース　ジェイソン・アーカリ演出　喜志哲雄訳)　2 月 22 日㈰　11：00～　兵庫県立芸術文化センター阪急中ホール　(服部)

㉕MET ライブ・ビューイング『メリー・ウイドウ』　2 月 21 日㈯～27 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　シネマ　(塹江 (2/23)・玉崎 (2/25))

㉖コンサート『ユニータ・デラ・サックス・デビューコンサート』　2 月 27 日㈰　15：00～　電気文化会館ザ・コンサートホール　(服部)

㉗演劇『完熟リチャードⅢ』(柿喰う客 中屋敷法仁演出)　2 月 28 日㈯　14：00～　大垣スイトピア文化ホール　(服部)

㉘オペラ『不思議の国のアリス』(名古屋芸術大学公演)　2 月 28 日㈯　14：00～　千種文化小劇場
(玉崎)

㉙オペラ『オテロ』　3 月 7 日㈯　14：00～　びわ湖ホール大ホール　(塹江)

㉚MET ライブ・ビューイング『ホフマン物語』　3 月 7 日㈯～13 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　シネマ　(塹江 (3/7))

㉛オペラ『魔笛』(三重音楽発信 vol. 9)　3 月 15 日㈰　14：00～　三重県文化会館大ホール　(服部)

㉜オペラ『カルメン』(名古屋二期会・稲葉地オペラ)　3 月 14 日㈯・15 日㈰　11：00～　名古屋市西文化小劇場　(服部 (3/14 13：00)・玉崎 (3/15))

㉝オペラ『4 音オペラ』(トム・ジョンソン作曲　日本語版世界初演)　3 月 28 日㈯　14：00～　愛知県芸術劇場・小ホール　(塹江)

㉞シネマ歌舞伎・野田版『鼠小僧』(中村勘三郎・中村橋之助・片岡孝太郎主演　2014 年公演録画)
4 月 4 日㈰～10 日㈮　11：50～　MOVIX 三好　(玉崎紫)

㉟MET ライブ・ビューイング『イオランタ＆青ひげ公の城』　3 月 28 日㈯～4 月 3 日㈮　10：00～
ミッドランドスクエア　シネマ　(塹江（3/30))

㊱演劇『エッグ』(NODA MAP 野田秀樹作・演出)　4 月 1 日㈬　14：00～　大阪・シアター
BRAVA!　(伊藤)

㊲歌舞伎『4 月花形歌舞伎』　4 月 4 日㈯～26 日㈰　11：00～，14：00～，16：00～　中日劇場
演目：[里見八犬伝] 塹江（4/7㈫ 14：00～)，伊藤（4/8㈬ 11：00～)，磯貝（4/8㈬ 16：00～)
演目：[三番叟・雪之丞変化] 服部・玉崎（4/14㈫ 11：00～)，磯貝（4/18㈯ 11：00～)

㊳シネ・オペラ『リゴレット』(1982 年ウィーン国立歌劇場・パヴァロッティ・グルヴェローヴァ主演・シャイー指揮)　4 月 10 日㈮　13：30～　名古屋市芸術創造センター　(磯貝・塹江)

㊴MET ライブ・ビューイング『湖上の美人』　4 月 11 日㈯～17 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　シネマ　(玉崎（4/12)・塹江（4/13)・伊藤（4/16))

㊵バレエ『白鳥の湖』(バーミンガム・バレエ)　4 月 18 日㈯　17：00～　愛知県芸術劇場大ホール
(塹江)

㊶コンサート『コルム・ウイルキンソン・コンサート』　4 月 26 日㈰　14：00～　梅田芸術劇場
(磯貝)

㊷演劇『ベイルートでゴドーを待ちながら』(SPAC)　5 月 4 日(月・祝)　13：30～　SPAC 舞台芸術公演稽古棟 BOX シアター　(伊藤)

㊸演劇『小町風伝』　5 月 4 日(月・祝)　16：00～　舞台芸術公演屋内ホール『楕円堂』　(伊藤)

㊹コンサート『シェーンブルン宮殿コンサート』[ウィーン]　5 月 7 日㈭　20：30～　(玉崎)

㊺狂言『歌争』『素袍落』(佐藤友彦主演)　5 月 9 日㈯　14：00～　杁中スクエア　(磯貝)

㊻演劇『かもめ』(地点)　5 月 10 日㈰　15：00～　愛知県芸術劇場小ホール

(服部・磯野（5/10）・伊藤（5/11））

㊼ミュージカル『マンマ・ミーア』（劇団四季）　5月20日㈬　13：30～　新名古屋ミュージカル劇場　（玉崎）

㊽演劇『アラバールからの『愛の手紙』』（劇団クセック）　5月21日㈭　19：30～　愛知県芸術劇場・小ホール　（暫江）

㊾演劇『地獄のオルフェウス』（T.ウイリアムズ原作・Philip ブリーン演出・大竹しのぶ主演）
5月23日㈯　18：30～　シアター・コクーン　（服部）

㊿映画『シンデレラ』　5月6日㈬　ミッドランドスクエア　シネマ　（磯貝）

51文楽『中日文楽』　5月31日㈰　16：00～　中日劇場　（暫江）
演目：仮名手本忠臣蔵

52『森麻季ソプラノ・リサイタル〈愛を歌う〉』（ピアノ山岸秀人）　6月5日㈮　18：45～　愛知県芸術劇場コンサートホール　（磯貝）

53METライブ・ビューイング『カヴァレリア・ルスティカーナ』＆『道化師』　5月23日㈯～29日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　シネマ　（暫江（5/28））

54オペラ『フランス・オペラへの誘いーマスネの魅力』（名古屋オペラプロジェクト主催　岡本茂朗構成・演出）　5月30日㈯　17：00～　しらかわホール　（服部）

55演劇『アートART』（ヤスミナ・レザ作　パトリス・ケルブラ演出）　5月28日㈭　19：00～　日本特殊陶業市民会館ビレッジホール　（服部・玉崎）

56オペラ『フィガロの結婚～庭師は見た～』（新演出：野田秀樹演出・井上道義指揮）　6月6日㈯・7日㈰　14：00～　兵庫県立芸術文化センター大ホール　（服部（6/6）・玉崎（6/7））

57オペラ『セヴィリヤの理髪師』（ハンガリー国立歌劇場来日公演）　6月13日㈯　17：00～　愛知県芸術劇場大ホール　（暫江・玉崎）

58演劇『姥捨 春夏秋冬』（ハラプロジェクト）　6月20日㈮　19：00～　七ツ寺共同スタジオ（暫江）

⑲演劇『敦―山月・名人伝―』(中島敦原作・野村萬斎構成・演出)　6月21日㈰　13：00～　世田谷パブリックシアター　(服部)

⑳歌舞伎『三人吉三』(Newシネマ歌舞伎　シアターコクーン上演舞台・串田和美演出)　6月23日㈫　13：30～　ミッドランドスクエア　シネマ　・　6月27日㈯　四日市109シネマ
(磯貝(6/23)・服部(6/27))

㉑オペラ『愛の妙薬』(稲葉地オペラ)　6月27日㈯・28日㈰　14：00～　名古屋市東文化小劇場
(磯貝(6/27)・玉崎(6/28))

㉒オペラ『ポポイ』(倉橋由美子原作・間宮芳生作曲・宮城聰演出・波多野睦美MS出演)　6月28日㈰　静岡音楽館AOIホール　(服部)

㉓映画『[画家モリゾ] マネの描いた美女　名画に隠された秘密』(カトリーヌ・シャンプティエ監督)　6月29日㈪　11：05～　名演小劇場　(塹江)

㉔映画『ターナー、光に愛を求めて』(マイク・リー監督)　6月29日㈪　13：15～　名演小劇場
(塹江)

㉕ナショナル・シアター・ライブ　演劇『スカイライト Skylight』(David Hare作・Stephen Daldry演出 NT公演)　7月3日㈮～8日㈬　17：00～　TOHOシネマズ・名古屋ベイシティ
(伊藤・玉崎・玉崎紫(7/3)・服部(7/5))

㉖ミュージカル『ラヴ・レター』(浅田次郎原作・音楽座ミュージカル)　7月5日㈰　13：00～　日本特殊陶業市民会館ビレッジホール　(玉崎)

㉗シネ・オペラ『ウィリアム・テル』(英国ロイヤル・オペラ公演)　7月6日㈪　17：00～　TOHOシネマズ名古屋ベイシティ　(塹江)

㉘狂言『鬼瓦』、『縄綯』、『鈍太郎』、『牛盗人』(第16回名匠狂言会)　7月12日㈰　13：30～　名古屋能楽堂　(磯野)

㉙ミュージカル『南太平洋』(別所哲也・藤原紀香主演)　7月15日㈬　18：00～　・　16日㈭　13：30～　愛知県芸術劇場大ホール　(玉崎(7/16)・磯貝(7/15))

⑰演劇『メアリ・スチュアート』(ダーチャ・マライーニ作、中谷美紀・神野三鈴主演)　7月19日㈰　13：00～　ウィンクあいち大ホール　(服部)

⑪オペラ『オペラの魅力『アンナ・ボレーナ』『エフゲニー・オネーギン』他』(岡本茂朗主宰)　7月18日㈯　17：00～　愛知県芸術劇場・コンサートホール　(塹江)

⑫演劇『マクベス』(佐々木蔵之助・一人芝居)　7月19日㈮　19：00～　パルコ劇場　(伊藤)

⑬演劇『NAGASAKI DUST』(ジェシカ A. ロビンソン演出)　7月20日㈪　13：00～　愛知県芸術劇場小ホール　(伊藤)

⑭演劇『だるい女』(あおきりみかん)　7月20日㈪　16：00～　G PIT　(服部)

⑮コンサート『音楽の玉手箱』(杉山和代・吉見佳晃)　7月14日㈫　11：30～　宗次ホール　(磯貝)

⑯オペラ『椿姫』(兵庫県立芸術文化センター開館10周年記念公演・佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2015 ロッコ・モンテリーニ演出・マイム振付/ヴィオレッタ森麻季)　7月25日㈯　14：00～　兵庫県立芸術文化センター大ホール　(服部・玉崎)

⑰ミュージカル『サンセット大通り』　7月26日㈰　12：00～　愛知県芸術劇場大ホール　(玉崎)

⑱演劇『雲流れる果てに・群青』(俳優館)　7月31日㈮　19：00～　愛知県芸術劇場小ール　(伊藤)

⑲オペラ『竹取物語』(作曲・台本：沼尻竜典　指揮：沼尻竜典　演出：栗山昌良)　8月8日㈯　14：00～　びわ湖ホール・中ホール　(塹江)

⑳歌舞伎『地球投五郎宇宙荒事』(六本木歌舞伎・工藤官九郎作・三池崇史演出・海老蔵主演)　8月6日㈭・8日㈯　12：00～　中日劇場　(服部(8/8)・磯貝(8/6))

㉑演劇『茨姫』(県芸ミニセレ[AAF戯曲賞]・地点公演)　8月13日㈭　19：30～　愛知県芸術劇場小ホール　(服部)

㉒演劇『トロイラスとクレシダ』(鵜山仁演出　世田谷パブリックシアター＋文学座＋兵庫県立芸術文化センター公演)　8月20日㈭　18：30～　大垣市民会館大ホール　(服部)

㊸オペラ『こうもり』(メルビッシュ音楽祭来日公演)　9月3日㈯　18：30～　愛知県芸術劇場大ホール　(暫江)

㊹オペラ『オルフェオ』(本山英毅指揮　びわ湖ホール声楽アンサンブル　演奏会形式)　9月5日㈯　14：00～　びわ湖ホール中ホール　(暫江)

㊺能『橋弁慶』、狂言『仏師』、囃子『康船』、能『葵上』(名古屋能楽堂9月定例公演　徳川家康公没後四百年記念『家康公ゆかりの能』)　9月6日㈰　10：00～　(磯野)

㊻ミュージカル『ピピン PIPPIN』(2013年 Broadway 再演版・来日公演)　9月9日㈬　14：00～　東急シアターオーブ(ヒカリエ 11F)　(玉崎)

㊼演劇『夜への長い旅路』(E.オニール原作・熊林弘高演出・麻美れい・益岡徹主演)　9月11日㈮　18：30～　シアタートラム　世田谷パブリックシアター　(服部)

㊽オペラ『魔法の笛』(オペラシアターこんにゃく座公演・林光作曲・演出　多田羅迪夫客演)　9月12日㈯　13：00～　俳優座劇場　(服部)

㊾ミュージカル『貴婦人の訪問』(涼風真帆・山口祐一郎主演ウィーン版)　9月12日㈯・13日㈰　12：00～　中日劇場　(玉崎・磯貝(9/13))

㊿オペラ『ドン・ジョヴァンニ』(英国ロイヤルオペラ来日公演)　9月20日㈰　13：30～　NHKホール　(暫江)

(51)オペラ『マクベス』(英国ロイヤルオペラ来日公演)　9月21日(月・祝)　13：30～　東京文化会館　(暫江)

(52)コンサート『輝かしい古楽の祭典Ⅲ　J.S.バッハの真髄』　9月27日㈰　14：00～　長久手文化の家森のホール　(磯貝)

(53)人形浄瑠璃文楽　10月2日㈮　名古屋市芸術創造センター
昼の部(14：00～)：『団子売』・『心中天網島』　(暫江・磯貝)
夜の部(18：30～)：『絵本大功記』・『日高川入相花王』　(暫江・磯貝)

(54)演劇『受難』(第49回『受難』公演　南山大学野外宗教劇)　10月10日㈰　18：00～　南山大学

構内パッヘ・スクエア　(磯野・服部・塹江)

⑮演劇『西遊記』(流山児★事務所)　10 月 15 日㈭　19：00～　四日市市文化会館第 1 ホール　(服部)

⑯狂言『狐塚』、能『藤戸』(名古屋能楽堂 10 月定例公演)　10 月 16 日㈮　18：30～　名古屋能楽堂　(磯野)

⑰歌舞伎『錦秋名古屋顔見世』　10 月 13 日㈯～25 日㈰　日本特殊陶業市民会館大ホール
昼の部(11：00～)：『あんまと泥棒』・『藤娘』・『松浦の太鼓』　(塹江(10/16)・磯貝(10/17))
夜の部(15：30～)：『俊寛』・『太刀盗人』・『浮世柄比翼稲妻』
(塹江(10/19 夜)・伊藤(10/22 夜)・磯貝(10/16・22 夜))

⑱オペラ『イーゴリ公』(ブルガリア国立歌劇場来日公演)　10 月 17 日㈯　17：00～　愛知県芸術劇場大ホール　(塹江)

⑲宝塚歌劇・宙組公演(コメディ『メランコリック・ジゴロ』＆レビュー『シトラスの風』)
10 月 17 日㈯　18：00～　日本特殊陶業市民会館フォレストホール　(磯貝)

⑳演劇『ミュルミュルミュール Mur Mures de Murs(壁のつぶやき)』(芸文フェス・ミニセレーヴィクトリア・ティエレ＝チャップリン構成・演出)　10 月 22 日㈯　19：00～　愛知県芸術劇場小ホール　(服部)

㉑演劇『フォースタス』(演劇集団・円　上演台本鈴木勝秀)　10 月 23 日㈮　19：00～　東京芸術劇場シアター・ウエスト　(服部)

㉒ミュージカル『TOP HAT』(来日ロンドン公演)　10 月 24 日㈯　12：00～　梅田芸術劇場大ホール　(玉崎・紫)

㉓ミュージカル『チェス Chess』(ABBA 作曲・Tim Rice 作詞)　10 月 24 日㈯　18：30～　梅田芸術劇場シアタードラマシティ(中ホール)　(玉崎・紫)

㉔オペラ『オペラの魅力 Vol. 24』(岡本茂朗主宰)　10 月 30 日㈮・31 日㈯　18：00～　名古屋市芸術創造センター　(塹江(10/30))

㉕ミュージカル『プリンス・オブ・ブロードウエー』(世界初演)　11 月 1 日㈰　17：30～　渋谷・

東急シアターオーブ　(伊藤)

⑯MET ライブ・ビューイング『イル・トロヴァトーレ』　10 月 31 日㈯～11 月 6 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　シネマ　(服部・玉崎（11/1）・塹江（11/2))

⑰オペラ『椿姫』(プラハ国立歌劇場来日公演　デジレ・ランカトーレ主演)　11 月 3 日(火・祝)　16：00～　愛知県芸術劇場大ホール　(塹江・玉崎)

⑱映画『PAN―ネバーランド、夢の始まり』　11 月 3 日(祝・火)　ミッドランドスクエア　シネマ　(磯貝)

⑲『オペラ・ガラコンサート　with パイプオルガン』(愛知芸文フェス)　11 月 3 日(祝・火)　15：00～　愛知県芸術劇場コンサートホール　(玉崎)

⑳演劇『おふくろ』(田中千禾夫作・木島勲演出、劇団みどり第 3 回公演)　11 月 7 日㈯　13：30～・16：30～　緑文化小劇場　(磯野)

㉑ミュージカル『パッション』(Passion)（Sondheim 作曲）　11 月 13 日㈮・14㈯　14：00～　兵庫県立芸術文化センター・中ホール　(服部（11/13）・玉崎（11/14))

㉒現代能楽集Ⅷ『道玄坂綺談』　11 月 15 日㈰　14：00～　世田谷パブリックシアター　(伊藤)

㉓ナショナル・シアター・ライブ『リア王』(サム・メンデス演出・アンコール上映)　11 月 13 日㈯～16 日㈰　17：00～　TOHO シネマズ・名古屋ベイシティ　(服部（11/9）・伊藤（11/17))

㉔舞台収録映像『夏の夜の夢』(Julie Taymor ジュリー・テイモア演出、Broadway，2014 公演)　11 月 13 日㈮　17：00～　TOHO シネマズ　大阪ステーションシネマ　(服部)

㉕MET ライブビューイング『オテロ』　11 月 14 日㈯～20 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　シネマ　(塹江（11/15))

㉖MET ライブ・ビューイング『タンホイザー』　11 月 28 日㈯～12 月 4 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　シネマ　(塹江（12/4))

㉗演劇『Battlefield』(Peter Brook 演出)　11 月 25 日㈬　19：00 ～　新国立劇場中ホール　(伊藤)

⑱バレエ『白鳥の湖』(マリンスキー・バレエ劇場来日公演)　11 月 29 日㈰　17：00～　愛知県芸術劇場大ホール　(暫江)

⑲コンサート『豊田市民合唱団』(竹本泰蔵指揮)　11 月 29 日㈰　14：00～　豊田市コンサートホール参号館 10F　(玉崎)

⑳演劇『王女メディア』(平幹二朗主演・演出)　12 月 3 日㈭　18：15～　四日市市民文化会館第 1 ホール　(服部)

㉑ミュージカル『クレージー・フォー・ユー』　12 月 4 日㈮　13：00～　愛知県芸術劇場大ホール　(磯貝・玉崎)

㉒オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』(愛知県立芸術大学オペラ)　12 月 5 日㈯・6 日㈰　14：00～　長久手文化の家・森のホール　(玉崎・磯貝 (12/5))

㉓能『玉葛』、狂言『髭櫓』、舞囃子『安宅』、能『船弁慶』(名古屋能楽堂 12 月特別公演)　12 月 6 日㈰　12：30～　名古屋能楽堂　(磯野)

㉔シネ・オペラ『椿姫』(ドミンゴ＆ストラータス主演・1982 年 MET 公演録画)　12 月 9 日㈬　18：30～　名古屋市芸術創造センター　(磯貝)

㉕コンサート『IL DEVU イル・デーブ』12 月 11 日㈮　13：00～　名古屋市青少年文化センター・アートピアホール　(磯貝)

㉖オペラ『ルサルカ』　12 月 12 日㈯～13 日㈰　14：00～　びわ湖ホール・中ホール　(暫江 (12/13))

㉗演劇『薔薇の花束の秘密』(SPAC　森新太郎演出・マヌエル・プイグ作)　12 月 19 日㈯　16：00～　静岡芸術劇場　(服部)

㉘演劇『ハラ版天守物語』(ハラプロジェクト)　12 月 19 日㈯～23 日(水・祝)［日により 13：00，18：00，19：00］　名古屋能楽堂　(暫江 (12/20 18：00))

㉙演劇『お召し列車』(燐光群　坂手洋二演出　渡辺美佐子主演)　12 月 20 日㈰　14：00～　愛知県芸術劇場小ホール　(服部)

⑬⓪酒井正志　2015 年イギリス観劇演目

2015 年春

1．The Broken Heart（Shakespeare's Globe: Sam Wanamaker Playhouse）　4 月 17 日㈮
2．Love's Sacrifice（Swan, Stratford-upon-Avon）　4 月 18 日㈯
3．Death of a Salesman（Royal Shakespeare Theatre, Stratford-upon-Avon）　4 月 18 日㈯

2015 年夏

4．Richard II（Shakespeare's Globe: Sam Wanamaker Playhouse）　8 月 8 日㈯
5．Everyman（National Theatre: Olivier）　8 月 10 日㈪
6．As You Like IT（Shakespeare's Globe）　8 月 11 日㈫
7．Much Ado about Nothing（Shakespeare's Globe）　8 月 13 日㈭
8．The Importance of Being Earnest（Vaudeville）　8 月 17 日㈪
9．The Merchant of Venice（Royal Shakespeare Theatre, Stratford）
10．Volpone（Swan, Stratford-upon-Avon）　8 月 22 日㈯
11．Othello（Royal Shakespeare Theatre, Stratford-upon-Avon）　8 月 24 日㈪

⑬①2015 年夏　玉崎紀子・紫　ロンドン＆チチェスター観劇演目

1．Entertainment：Hetty Feather（Duke of York's Theatre）　8 月 18 日㈫ 14：00～
2．Musical：Gypsy（Savoy Theatre）　8 月 18 日㈫ 19：30～
3．Musical：Bend It Like Beckham: The Musical（Phoenix Theatre）　8 月 19 日㈬ 14：30～
4．Musical：High Society（Old Vic Theatre）　8 月 21 日㈮ 19：30～
5．Musical：Sunny Afternoon（Harold Pinter Theatre）　8 月 22 日㈯ 14：30～
6．Musical：Kinky Boots（Adelphi Theatre）　8 月 22 日㈯ 19：30～
7．Musical：Beautiful: The Carole King Musical（Aldwych Theatre）　8 月 24 日㈪ 19：30～
8．Comedy：The Importance of Being Earnest（Vaudeville Theatre）　8 月 26 日㈬ 19：30～
9．Musical：Seven Brides for Seven Brothers（Regent's Park, Open Air Theatre）　8 月 27 日㈭ 19：45～
10．Comedy：The Mentalist（Wyndham's Theatre）　8 月 29 日㈯ 15：00～
11．Musical：Memphis: The Musical（Shaftesbury Theatre）　8 月 29 日㈯ 19：30～
12．Comedy：The Beaux' Stratagem（National Theatre, Olivier）　9 月 1 日㈫ 19：30～
13．Drama：1984（Playhouse Theatre）　8 月 26 日㈬ 14：30～
14．Musical：Dusty（Charing Cross Theatre）　9 月 2 日㈬ 19：30～
15．Musical：Mack & Mabel（Chichester Festival Theatre）　9 月 3 日㈭ 19：30～
16．Musical：You Won't Succeed on Broadway If You Don't Have Any Jews
（St. James Theatre）　9 月 4 日㈮ 19：30～
17．Musical：Kinky Boots（Adelphi Theatre）　9 月 5 日㈯ 14：30～
18．Musical：Gypsy（Savoy Theatre）　9 月 5 日㈯ 19：30～

Ⅱ．観劇短評選

⑱こんにゃく座『白墨の輪』　2月8日　世田谷パブリックシアター

こんにゃく座『白墨の輪』を世田谷パブリックシアターで観た。大変に見応えがあった。この作品は作曲家林光が自らブレヒトの『コーカサスの白墨の輪』を題材として提案し、作曲して、1978年に初演された。その後2001年に林光によってピアノ版からオーケストラ版に書き換えられ上演されているが、今回、さらに作曲家グループ「緋国民学派」の作曲家である吉川和夫、寺島陸也、萩京子によって木管カルテットとピアノの五重奏に書き換えられた。ちなみに「緋国民学派」というのは19世紀後半の「国民学派」のパロディであろう。寺島は、びわ湖ホール『三文オペラ』や、静岡音楽館オペラ『ポポイ』の指揮者を務めており、20世紀以降の音楽の作曲・演奏に通じた音楽家である。こんにゃく座の音楽に欠かすことのできない作曲家やピアノの服部真理子をはじめとする演奏家とうた役者たちが、息もぴったりにシーンごとに陰翳に富んだ素晴らしい世界を創りあげた。

演出は、2015年アートクリティックで取り上げられた劇団燐光群『カウラの班長会議』『お召し列車』の作・演出の坂手洋二である。彼は、社会の矛盾や現実を鋭く切り取る演出家として活躍している。ブレヒト作品は初めての演出だそうだが、彼の演出だからと、こんにゃく座の舞台を初体験した観客が結構いるように推察された。美術に島次郎、振付に矢内原美邦の名が並ぶ。音楽監督の萩京子によれば、林光は、「上演に際して変更を加えていくことに常に積極的だった」(「オペラ小屋99」p.3) というが、舞台芸術で現在活躍している人々が名を連ねた今回の書き換え上演は、変化していく社会のありように敏感に反応した説得力あるものだった。

ブレヒトの原作において『白墨の輪』は、コーカサスの農民たちが歌芝居として演じる劇中劇で、「元来は二つの物語」から成っていた。一つの話は、洗濯女グルシェが為政者の子を拾い、命からがら逃げてその子を苦労して育てるが、養育を巡って生みの親と裁判で争う話である。もう一方の話は、腐敗した社会において裁判官になり、賄賂によって簡単に判決を歪める利己的・背徳的な人物アツダクの物語である。二つの話が地面に描かれた白墨の輪で重なる。裁判では彼が輪の中に立たせた子供を「引き寄せよ」と二人の母に命令し、生みの親が二度引き寄せる。グルシェはその子が裕福な家で育てられたほうが幸せかもしれないと考えたり、引っ張りすぎたら子の命が危ないと現実的に考えたりして、大切に育てた子の手を放してしまうのである。その様子を見てアツダクが、子はグルシェが育てるべきだと判決を下す。このエピソードは民話で語られてきたものであり、民衆が権力者に対して溜飲を下げる場面であるが、アツダクの言動と天晴れな判決をとおして権力、社会正義、人間の幸福、真実などに対する根源的な問いかけが行われているのである。彼はいわゆるトリックスターであり、その後は姿を消してしまう。歌芝居による劇中劇構造は、その虚構性を強調することで、民話の発する社会批判や告発の鋭さを和らげているのだろう。

こんにゃく座による上演には、この外枠の構造はない。しかし、天井の高い世田谷パブリックシアターの舞台空間に、能舞台が傾いているような巨大な滑り台状の斜面が設置され、進行役の歌手たち

がコーラスの役割を果たすと、高さと奥行きのある異空間が出現した。役者たちはこの斜面を、転がり落ちたり登ったり、そこに留まったりして文字通り体を張って、人間の堕落、傲慢、思い上がり、見下し、だましあい、社会の崩壊、混乱などを可視化した。群衆シーンには迫力を感じた。

なかでも、甲騎兵一人を殺して追われているグルシェが、深い氷河に架かっている今にも落ちそうなつり橋を渡るシーンの臨場感には圧倒された。2本の太いロープが斜面上から降ろされ揺らされていた。隊商の人たちが囃したてるなか、グルシェは子供を抱きながら揺れるロープを掴むと、一気に斜面を駆け下りた。渡りきったのである。兵士に「あかんべぇ」をするグルシェ。敵に追われつつ橋を渡るシーンは冒険物語や冒険映画などでよく見かけるが、舞台上でロープのみを用いて、不安や緊張、動揺からその解放に至るまでが巧みに表現されていた。彼女が全くの善人ではなく、したたかな庶民として描かれていることも、共感を呼ぶところである。

大石の演じるアツダクは、無法不法悪徳を生きた大酒飲みのいい加減な小役人であったが、動乱後に誰もいないからと裁判官に祭り上げられた人物である。民衆が富ばかりを求め政治に無関心になれば、こんな人が（でも）担ぎ出されて権力をふるうことになるのだと、恐ろしくもリアリティを感じた。しかし、大石の力みのない暖かな声としなやかな動きは、把えどころのないアツダクの柔軟な政治的判断を鮮やかに表し、笑いと喝采を博した。グルシェの育てる子供は、子役を使わず目鼻立ちもないシンプルな布製の人形であったが、リアルでなかったため却って普遍性と物語性が高められたように思われる。こんにゃく座のアツダクの物語と子育てを巡る物語は現代社会にたいする警鐘ばかりか希望を示したのである。

非常に洗練された舞台装置と演出、対照的な大石をはじめとするベテラン歌役者たちの泥臭いまでの演技とグルシェ役太田まりの熱演が光った。東欧の民族衣装を基調にした色鮮やかで可愛らしい衣装も素敵だった。それぞれの持ち分できちんと訓練を積んだ人たちが誠実に創り出した舞台であり、若い人たちがこれを見たら社会を見る目が少し変わるかもしれないと思われた。全国巡業を切に望んでいる。

（服部　記）

㉗柿食う客『女体シェイクスピアシリーズ 007　完熟リチャードⅢ』

2月28日　大垣スイトピア文化ホール

劇団柿食う客の『女体シェイクスピアシリーズ 007　完熟リチャードⅢ』を大垣市スイトピアセンター文化ホールで観た。複合文化施設の中ホール程度の規模の劇場である。この公演は吉祥寺と大阪を回ったあと、大垣市で1日のみの2回公演を行い全日程を終える。公演は大垣市文化事業団の主催によるもので、地域創造の助成を得ていた。この後、柿食う客は3週間ほど大垣市に滞在し、市民とともに演劇を創る予定だそうだ。東海地区で柿食う客の上演を見たのは2013年の三重県文化会館での上演以来で、うれしいことであり、大垣市民が、柿食う客と協同した演劇体験を持つことができるというのは、羨ましい限りである。

稀代の大悪人リチャード三世は薔薇戦争が終結してからチューダー朝が成立していくまでの過程で、

チューダー朝神話形成の一端を担ってきた王とされている。「呪ってやる、この世の楽しみ何もかも」とこの不平分子は、王位簒奪を決意し、陰謀をめぐらし、人を欺き非道の限りを尽くす。この作品は復讐が次々に復讐されていくプロットを持つが、彼の言動そのものが演劇的であることや、政権争いに巻き込まれ運命に翻弄されてきた女性たちが「活躍」することからも、翻案上演や映画化が多い人気戯曲である。

最後に戦場で馬を失ったとき、リチャードは馬と王国とを交換しようという。彼にとって陰謀から王位簒奪に至る過程は一連のゲームに過ぎなかった。彼はゲームに熱中するあまり、ゲームの手順が目的と化してしまったのである。中屋敷は、リチャードの悪行のゲームと女性たちの呪詛に焦点を合わせて、登場人物とセリフを大幅にカットし、上演時間を 100 分ほどに縮めた。悪が熟し朽ちていく過程は黒い衣装の女優 7 人で演じられた。スカート着用の 6 人の女優たちが、一人二役も三役もこなし、ただ一人パンツ姿の女優がリチャードを演じた。舞台上の美しい女性たちは「悪口は蜜の味」という言葉を思い出させたが、その脚線美をはたして強調する必要があったのだろうか。

舞台上には 7 人の人間が何とか演技できるほどの枠が設置され、女優たちはその枠の中にずっと立ち続け、出番になると前に出てきてセリフをしゃべり演技した。他の装置も小道具もほとんどなく、衣装も換えないのだから、演じる側も見る（聴く）側も大変であった。新キャラが登場するたびに名が名乗られ、誰の役を演じているのかわかる仕組みになっていたが、もともと筋が複雑なうえに場面がカットされている。関係を理解し、物語を追うのに時間がかかった。しかし、漫才のような掛け合いやパントマイムもどきのパフォーマンス、演技はかなり刺激的でよく仕上がっており、舞台全体は暗くわずかな照明があるだけであるため、想像力が刺激された。また、四角い舞台上で名乗って演技するのは幾分狂言のようであった。

さて、英語で 'call names' とは「呪う」という意味である。柿食う客の女優たちが名乗る行為とは別に、この作品のテキスト内には名前が氾濫し、名を呼ぶことと呪詛することを取り違える言葉遊びすら見られる。「中屋敷法仁　人格分裂インタビュー」(『完熟リチャードⅢ パンフレット』）には、「呪いと血と因果というテーマを女体に近づけた」との説明がある。実は舞台上で名前を呼び合う行為そのものが、全体を通してみると呪詛のコロスとなっていたのである。

上演中、一定のリズムで水の流れるような不気味な音が一貫して聞こえていた。アフタートークで質問したところ、胎児が宿る子宮の音を録音したものだという。4 幕 4 場でリチャードの母である公爵夫人は、リチャードが胎内にいる間に彼を殺しておけばこの世は地獄にならなかったと嘆き節を語る。同じ場の後半で、彼はエリザベスに向かって、「私はあなたの子供たちを娘御の胎内に埋葬し、そこを不死鳥の巣として蘇らせよう」(小田島雄志訳）と語る。中屋敷はテキストをよく読み込んで、女体をとおして、呪詛、名前、子、地獄、子宮、墓という連鎖するイメージを現前させたのである。彼は柿食う客でやりたいことは、「既存の価値観を刺激すること」と語り、女体シリーズが「こういうもの」とバレてしまったら、終わると語っている。このシリーズは目も耳も離せない。

(服部　記)

⑯『フィガロの結婚～庭師は見た！～』（新演出） 6月6・7日　兵庫芸文センター大ホール

全国共同プロジェクト『フィガロの結婚～庭師は見た！～新演出』を兵庫県立芸術文化センターKobelco大ホールで見た。期待以上に面白く大いに楽しんだ。

この公演は、30年前、演出家の野田秀樹に指揮者井上道義が「一緒にオペラをやりましょう」と申し込んだことに端を発しているという。企画が具体化して動きだしたのが、2012年。その後全国の公共ホールやオーケストラ、合唱団、演劇集団を巻き込んで、平成27年度文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業」（共同制作支援事業）として全国10カ所13公演が行われる偉業となった。これを成し遂げたのは演劇と音楽の分野の二人の奇才と、それぞれ東京芸術劇場芸術監督と石川県立音楽堂アドヴァイザーという立場であることをまず指摘しておきたい。

ダ・ポンテの台本によるオペラ・ブッファ『フィガロの結婚』には、変装、人物の取り違え、騙しあい、貴種流離譚、価値の逆転、結婚の障害と成就などいわゆる伝統的な喜劇のモチーフが盛り込まれている。舞台設定を、東西の価値観と庶民と貴族の価値観が拮抗する黒船来航時の長崎の貴族の館とした野田版『フィガロの結婚』は、外国人の伯爵夫妻と小姓のケルビーノが原語のイタリア語で、他の登場人物は日本語で歌った。野田が自ら制作したという字幕は、写真や文字などを映し出し、「話す」と「放す」などの駄洒落も文字で説明した。工夫に富みよくできていた。野田はこれまでに、（故）中村勘三郎と組んで『野田版 研辰の討たれ』『野田版 鼠小僧』などの歌舞伎や、幕末の日本に翻案設定した『贋作罪と罰』を上演している。翻案は野田の演劇スタイルの一つであり、あっと驚く設定と意外性、多様な言葉遊びとスピード感あふれる笑いから、懐かしくて新しい世界が広がるのである。

庭師（アントニオ）役の俳優廣川三憲による「女の敵は自分自身、過去の自分と争う」という主旨の口上で舞台が開き、伯爵夫人のアリア「過ぎ去った日々は」が始まる。廣川が望遠鏡を逆さにのぞき見ることで、もともと「ばかげた一日、フィガロの結婚」というこの作品が、女の一生のエピソードをてんこ盛りにした物語として提示されるのである。マルチェ里奈（マルチェリーナ）とスザ女（スザンナ）が「お先にどうぞ」と掛け合うコミカルな場面では、「しわくちゃのババァ」の老いと若さの対決が歌と花笠踊りで強調され、バルバリーナのピンを無くして悲しそうに歌うアリアが処女喪失を暗示した。

舞台上には人一人が入れるくらいのロッカー状の箱が3つ置かれていた。箱の仕掛けは野田の他の作品『エッグ』や『贋作罪と罰』でも効果的に用いられていたが、移動や扉の開閉により、女の一生が閉じ込められる居室やケルビーノが隠れる衣装部屋、逢い引きをする東屋に瞬時に変えられる。記憶の生成や忘却と絡む小空間は可視化された記憶装置なのである。また演劇集団のメンバーが長い竹竿状の棒やロープのみならず、身体そのものを小道具とすることによって木立、幕、家具などを表わした。竹竿状の棒は、野田MAPの『リチャード3世』で用いられた孟宗（妄想）竹に似ているが、『ピーター・ブルックの魔笛』やジュディー・テイモア演出『夏の夜の夢』（2014）においても登場人物の行く手を阻む障害物として舞台上に林立していた。劇世界では伯爵やフィガ郎の浮気の妄想から混乱が生じ、彼らは女性陣に復讐として一杯食わされるのである。ケルビーナが隠れた虎の皮の敷物

や土鍋などの小道具は、「虎の威」「一杯食わす」など駄洒落の可視化であった。さらに大円団において、伯爵が同じドレスを着た夫人とスザンナを見て驚くシーンは、かつて野田も演出した『十二夜』の瓜二つの兄弟の再会の場と重なり、伯爵夫人の最後に発した銃は舞台上の銃は必ず発射されるという「チェーホフの銃」を連想させた。スザンナらによる文楽の人形振りも見られた。ケルビーノの隠れたロッカーに四方から剣を刺し、いるかいないかを確かめる演出は、昔のマジックショーの出し物を思い出させた。斯様に野田は観客たちの演劇体験に挑戦し、その記憶を引き出すように仕掛け、一方観客はそのゲームを大いに楽しんだのである。

野田は公演パンフレットで日本人が西洋人と出会う「二重性」、演劇とオペラの「二重性」について言及しているが、さらに上演におけるオリジナルと翻案、作り手と受け手、過去と現在いう「二重性」も視野に入れていたと思われる。この猥雑で盛りだくさんの野田ワールドと拮抗する形で、モーツァルトの世界が音楽家によってしっかり作られていたのにはさらなる驚きであった。相手の領分を尊重してそこに踏み込まない、まさにアンサンブルの手法が生かされていた。

指揮者の井上は、古楽のアビゲイル・ヤングをコンサートマスターに迎えて、兵庫芸術文化センター管弦楽団を指揮した。チェンバロの代わりを電子ピアノが務め、古楽演奏というには物足りなかったが、若い楽団員が健闘していた。歌手たちは皆すばらしく、伯爵役のナターレ・デ・カロリスやマルチェリーナ役の森山は貫禄であった。注目の若手ソプラノ小林沙羅は、歌ばかりか演技も軽やかで、数年前、兵庫のプロデュースオペラ『こうもり』でアデーレ役を演じたときよりも、声が伸びやかになったように思われた。あのとき会場で井上を見かけたのを思い出したが、本公演の準備が始動していたのかもしれない。また、ケルビーノ役はバロックを歌うカウンターテナーのマルテン・エンゲルチェズによって演じられた。ズボン役の女性が演じるのと異なり、上背のあるケルビーノの女装姿はそれだけでも滑稽であったが、カウンターテナー特有の些か不安定に響く声による歌唱は素晴らしく、アイデンティティの定まらぬケルビーノ像をあぶり出し興味深かった。現在注目すべきカウンターテナーの歌手がたくさんいるが、今後ケルビーノ役に彼らを配した上演が増えそうな予感がした。

演劇としてもオペラとしても大変に楽しめた本公演は、音楽界および演劇界にとってヒントと冒険に満ちている。もちろんこれまでにも、北とぴあ音楽祭の『病は気から』で静岡県舞台芸術センター(芸術監督宮城聰）が協力した例がみられるが、ここまで大規模に複数の公共劇場が制作・上演に助成し、協力してきたことはなかった。

お金と時間をかけて準備・制作してきたことが様々な地方の複数の劇場で上演されることによって、コストパフォーマンスが高まるばかりでなく、新しい観客の獲得につながると思われる。また、複数の上演を可能にするためには少数のスターを揃えるだけでなく、万一に備えアンダースタディをきちんと育てることが大変重要になってくる。出演者たちが作品にじっくりと安心して向き合い、芸術を深化させることができる基盤ともなるだろう。関東と関西に挟まれた東海地方には、複数の芸術大学や音楽大学、さらに立派な劇場もある。地の利を生かすべく、東海地方の公共劇場は今後このような共同制作事業の企画・制作・協力に是非名乗りを上げてもらいたいものである。「名古屋とばし」をこれ以上進ませてはならない。

(服部　記)

㉜『トロイラスとクレシダ』　8 月 20 日　大垣市民会館大ホール

公共劇場の世田谷パブリックシアターと兵庫県立芸術文化センターと文学座が共同に企画制作したシェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』を大垣市民会館で観た。チケット料金が他会場のよりも 2 割ほど安かったのは、大垣市の補助のお蔭である。地方都市で演劇・地域文化を活性化させるための施策をうれしいと思う反面、このような施策が増えれば、公的な財政援助を受けずに旅公演を続ける劇団のチケットが高くて売れなくなることになりはしまいかと複雑な気持ちになった。

さて、公演は文学座の鵜山仁が演出し、トロイラス役に浦井健治、クレシダ役にソニン、ヘクター役に吉田健作、ダイアミディーズ役に岡本健一と人気俳優を客演として迎え、脇を文学座の俳優が固めていた。浦井とソニンはこれまでに鵜山演出の作品、たとえば、新国立劇場『ヘンリー六世』などに出演しているが、人気俳優と文学座、シェイクスピアの問題劇という看板で観客動員を狙ったものと思われる。大垣市民会館は、大垣市郊外にある大駐車場を備えた 1394 席の大ホールである。平日の夜公演だったが、マイナーな作品であるにもかかわらず 7〜8 割ほどの客の入りであった。他県ナンバーの車も目立った。珍しい演目と話題性のある公演のため近隣都市からも観客を集めたと推察される。

この作品は恋人たちの名をタイトルに冠しているが、『ロミオとジュリエット』や『アントニーとクレオパトラ』などとプロットの展開の仕方が全く異なる。トロイの末の王子トロイラスは、パンダラスの仲介でクレシダと結ばれるが、捕虜交換で彼女はギリシャ側に引き渡されることになり、やがてトロイラスを裏切る。この話が、英雄ヘクターを中心とした戦いの筋のなかに組み込まれているのである。彼女の裏切り行為をトロイラスがのぞき見て嘆く「これはクレシダであってクレシダでない」という台詞が有名だが、その後二人がどうなったかは語られず、ヘクターの死後、パンダラスが悪態をついて芝居は終わる。一方、この恋物語を扱っている先行作家たちは、戦争のことにはほとんど言及せずに、裏切りの結末までを描いている。恋の行方に興味を持ち、裏切りに対して同情や嫌悪の感情を抱く観客ならば、シェイクスピアの終わり方を中途半端と感じるのも不思議ではない。問題劇とされてきたゆえんでもある。しかしこの作品は、物語とは筋を追うものだと信じている素朴な観客の予想を裏切る意地悪な劇であり、鵜山演出はその点を置さえていた。

通常の舞台の上に円形のステージが置かれ、その背後には階段状の石壁があった。このギリシャの野外劇場のようなセットに、天井から赤と白の大きな布が垂れ下がっている。布は場面ごとに引っ張られたり結ばれたり、ときに身体に巻き付けられたりして、両陣営やテントの内と外を表す仕切りや、勇士の姿を映し出すスクリーンとして機能した。小道具などの使用を最小限に押さえ、鵜山は、台詞と役者の身体、観客の想像力に賭けたのかもしれない。

役者たちは登場人物がどんなタイプであるか一見してわかるように演じていた。ヘレンはセックスシンボルのマリリン・モンローに似せた髪型とドレス姿で、パリスは軟弱な優男でトレンチコートを着ていた。トロイの英雄ヘクターは、戦場に行かせまいとする妻を家に閉じ込め、体面を重んじ自らの運命に立ち向かう悲壮感あふれたマッチョな男として振る舞っていた。テキストでは、彼が美しい

甲冑を着けた兵士を追い求めて命を落とすことに至ったとされているが、この上演では、揺れるスクリーン上に美しい甲冑を纏ったヘクターの姿を大きく映し出し、彼はその像に向かって戦いを挑んでいるのだった。『ドン・キホーテ』は当時流行した騎士物語のパロディであるが、空っぽの差別主義者ヘクターもドン・キホーテのように自分自身と戦っている。神話ではヘクターと並ぶギリシャ側の勇士アキリーズは、舞台ではドレッドヘアーに入れ墨をした醜悪で軽薄な男となっており、一騎打ちのルールを破ってヘクターを惨殺した。江守徹演じる白髪のプライアム王は、芝居がかった威厳を示していたが、無力な老人にすぎない。アガメムノンはディレクターチェアーに座わり威張っているが高みの見物をする統率力を欠いた男である。捕虜はISを連想させるオレンジ色の囚人服を着ており、渡辺徹の演じる商人風のパンダラスは下品な歌をよい声で歌った。このように叙事詩の英雄たちは、舞台上では卑近な人物となって物語性が剥奪されていたのである。

テキスト表面上に散在している言葉や伝統的なイメージは、舞台上に集められ重ねられることによって、元来の意味を裏切り、新たな輪郭を浮かび上がらせた。この効果はシェイクスピアの意図に添っていると筆者は考えるが、恋人たちの場合を中心に指摘してみたい。トロイラス役の浦井は、文学座員と比べて発声や演技が未熟なのか、そのように演じているのか不明だが、台詞回しがわざとらしく一部が聴き取りにくい。ロマンスの伝統では恋人に裏切られる気の毒な男とされているが、舞台上では若さが目立って裏切られても仕方ないと思われた。ソニンの演じるクレシダは、白いドレスを着て一見清楚であるが、同じく演技なのか素なのか不透明だが、恋愛経験豊富な性格の悪い女性に見えた。ロマンチックなはずの後朝の詩にはヒバリでなくカラスへの言及があり、興ざめするしらけた場面となって冷笑を誘った。クレシダを迎え入れるギリシャ勢の、足を踏みならし歓声をあげる様は、女性の扱いに慣れた洗練された男たちではなく、女性を嬲り者にする荒くれた男たちの野蛮さを示し、彼らを手玉にとってキスを与えるクレシダは、男たちの間で生きぬく術を知っているようだった。

クレシダの裏切りをのぞき見るトロイラスと知将ユリシーズの遣り取りは、垂れ下がった布の相乗効果もあって喜劇的な劇中劇となり、二人はそれをネタに漫才を行っているみたいであった。さらに外側にいるサーサイティーズは顔を黒く塗りつなぎを着て東北なまりで「いつだって流行するのは戦争とセックスだ。」と、語った。劇中劇に対するコメントは観客の側に立ったものが多いが、彼のコメントは不快に感じられた。

主催者挨拶にはこの作品を「普遍的な群像劇として立ち上げようとしている」(『トロイラスとクレシダ』公演パンフレット）とある。パロディや言葉遊びに満ちた作品の上演は観客の知の在り様に大きく依存するだろう。しかし、薄っぺらな死体が無造作に投げ捨てられる終幕の舞台は、サーサイティーズのコメントを、わかりやすく示したといえるだろう。筆者はこの風景に人文学が打ち捨てられていく様を重ねてしまった。トロイの御前会議における「アリストテレス」の例も上演においては皮肉にも省略されていた。恋人たちの消息が不明のままの結末は、わかりやすさに対する抵抗となっているかもしれない。

(服部　記)

⑫『TOP HAT』（イギリス来日公演） 10 月 24 日　梅田芸術劇場大ホール

イギリスからの来日公演『TOP HAT（トップ・ハット)』を、梅田芸術劇場メインホールで観た。TOP HAT は、1935 年公開の映画で、バレエのヌレエフさえもが「20 世紀最高のダンシング・スター」と呼んだフレッド・アステア主演により有名な映画に基づく舞台である。この映画は、1932 年から 6 年間のアステアとジンジャー・ロジャーズが踊った 9 本の RKO 映画ミュージカルの中でも、見事なダンスとアービング・バーリンの名曲のゆえに、最高傑作と認められている。親しみやすく、リズムのきいたアメリカ音楽そのもののバーリンの曲に乗せて、「頬寄せて君と踊れば、天国にいるような気持ち」("Cheek to Cheek") と歌うアステアがロジャーズと踊る魔法のようなダンス・シーンは、ロマンチックな恋の気分を伝え、ロジャーズの白い羽でできたドレスの翻る美しさも加わり、誰もが忘れられない。さらに映画題名トップ・ハット（シルクハット）は、燕尾服と正装用白の蝶ネクタイを身につけたアステアの舞台姿から、気品あるダンディというアステアを象徴した。映画の主題歌 "Top Hat, White Ties and Tails" のダンスは、後ろで踊るアステアと同じ衣装の大勢の男性ダンサー達がリズミカルなタップを踏み、楽しませる。だが、アステアは横一列に並んだダンサーを、遊園地の射撃遊びの標的のようと思いつく。銃にみたてたステッキで、タップの音を銃声にして、男達を一人づつ撃ち倒した後、笑顔で舞台袖に引っ込む。アステアのユーモラスな思いつきと射撃遊びが、いかにもアメリカ的で陽気なヴォードヴィルとなっている。

アステアの映画ミュージカルは、ダンスが物語の中に完全に統合され、意外にも舞台芸術を楽しめる映画となっている。なぜなら、彼の踊るダンスをブロードウェーの舞台で見るように、映画観客に見せたいと望んだアステアは、彼のダンス全体を画面に映すようにと撮影監督に要求した。それゆえ映画で見られる彼の見事なダンスがハリウッドのダンス・ミュージカルというジャンルを誕生させたのだ。時代を経ても彼のダンスは観客を魅了し、驚嘆させ、決して古くならない。

映画公開から 80 年を経た 2015 年の来日公演は、このダンス・ミュージカルを復活させたイギリスの新作舞台ミュージカルである。映画 TOP HAT を愛するイギリス人プロデューサー、ケニー・ワックス（Kenny Wax）が舞台化を企画し、アステアの遺児やバーリン財団との上演権交渉を経て、イギリス人スタッフを結集し、ほぼ全員イギリス人キャストで、ハリウッド映画を舞台に移した。その優れた舞台はイギリスで 3 年以上も公演された。ブロードウェーの名作舞台『オクラホマ！』や『マイ・フェア・レディ』をブロードウェーより演劇的で優れた舞台に再演することで知られるイギリス演劇界とはいえ、アメリカン・ミュージカル映画がイギリス演劇界によりここまで巧みに舞台化されたのに驚き、感嘆した。

2011 年この新作はロンドン北西のミルトン・ケインズで初演され、幾つかの都市での巡業後 2012 年春ウエスト・エンドに進出した。ウエスト・エンドでは、オルドウィチ・シアター（Aldwych Theatre）で、2012 年 4 月から 2013 年 10 月まで、 1 年半余上演された。筆者は 2013 年夏、このオルドウィチ劇場での盛況の公演を 2 回観劇した。翌 2014 年にはロンドン郊外ウインブルドンから始まり、1 年余（47 週）にわたって、全英主要都市において、ツァー・キャストによる公演が行われた。

2013年オリヴィエ賞授賞式では、ミュージカル新作作品賞 Best New Musical のほかに、振付賞(Bill Deamer)、衣装デザイン賞（Jon Morrell）を獲得した。この舞台がアステア振付・主演の映画のダンスを踏襲しながらも、舞台に相応しく新しく演出・振付され、1930年代の美しい衣装もあって見ごたえのある優れた舞台として蘇ったことが明らかである。そして2015年春、大好評に終わった宝塚公演の後、秋に全英ツァー・キャストによる来日公演が行われた（シアターオーブ9月30日〜10月12日、梅田芸術劇場10月16〜25日)。ブロードウェーからの『ピピン』とこの『トップ・ハット』を踏まえ、今年の来日公演は、ツァー公演キャストとはいえ、どれもレベルが高いとミュージカル批評家達に高く評価された。実際、『ピピン』も見事な舞台で大いに楽しんだが、来日『トップ・ハット』公演はロンドン公演に変わらずレベルの高い公演であった。

物語は、ブロードウェーの人気ダンサー、ジェリー・トラヴァーズ（アステアの役柄）と、美人モデル、デイル・トレモント（ロジャーズの役柄）とを巡る喜劇である。ジェリーは、ロンドンのホテル宿泊の最初の夜、彼のダンスが煩くて眠れないと苦情を言ってきた階下の部屋に泊まるデイルに一目惚れする。だがジェリーがロンドン舞台のプロデューサー、ホレス・ハードウィックと一緒にスィートに泊まっているため、デイルはジェリーが、彼女の親友マッジのご主人ホレスだと思いこむ。デイルの誤解と1930年代に流行のスクリューボール・コメディ常套の愉快な混乱が続き、二人を囲む多くの喜劇的脇役の道化芝居により、観客を楽しませる。最後にやっと二人は結ばれ、幕となる。この新作ミュージカル舞台は、映画の粗筋とダンス・シーンを、概してそのまま使っているが、90分の映画を160分の2幕の舞台にするために、バーリンの曲を新しく付け加えたり、人物像を膨らませるというさまざまな工夫がしてあり、モノクロの映画が色彩と華やかさにあふれる美しく楽しい舞台となった。映画の最後で恋が実り幸福なジェリーとデイルが踊るダンス「ピッコリーノ」("Piccolino")だけは、挿入される場面と使いかたが舞台では異なっている。イタリアの歌を取り混ぜたパスティーシュである音楽を重視して、舞台では第2幕ヴェニスの場面の幕開きに使われる。デイルの親友マッジが1節歌い、ホテルの避暑客達、水着姿の男女とホテルの従業員達までが、舞台一杯に踊り、陽気でエキゾチックな雰囲気を高め、観客を魅惑する。

映画で使われた残り4曲はそれぞれ、ほぼ映画通りに物語を展開させるものとして使われる。その中で、2曲目、ジェリーの踊る "No Strings（I'm Fancy Free)" のタップの音で眠れないと訴えたデイルのために、ジェリーが子供を寝かせる睡魔（sandman）になり、このメロディのリプライズに合わせ波に揺れる砂の音をたてて、デイルの眠りを誘う。ジェリーの部屋の階下に眠るデイルが、舞台では舞台セットの階上で眠る。舞台中央にある大きな円柱のような装置が回転して円柱の上部にデイルの寝室が現れる。舞台前面ではジェリーが砂のダンスを踊ると、彼女が眠る傍でサンドマンの影絵が踊る。寝室の影絵のダンサーはジェリーと寸分たがわずに踊る。新演出は、この仕掛けと影絵のダンスにより新鮮な舞台に変え、それでいながら、アステアが使った『有頂天時代』(Swing Time, 1936）でのダンス "Bojangles of Harlem" の影絵の趣向を思い浮かばせる。また "Isn't This a Lovely Day（To be Caught in the Rain)" も映画と同じ演出ながら、とりわけ秀逸な演劇的展開をもつダンスとなる。イギリス・ツイードの乗馬服を着たデイルが、ホテルから郊外へ乗馬の練習にで

かけ、馬場で雨が降り出すので、あずまやに雨やどりする。デイルの馬車の馭者に変装し、従いてきたジェリーが、「雨に降られて、君と居られすてきじゃない」と歌って、あずまやのデイルに近づき、踊りだす。ツンとしていたデイルだが、やがてダンスのリズムに誘われ、ジェリーに合わせたステップを始め、少しづつ踊りだし、やがて二人はぴったりと息のあったデュエットを踊る。最後は同時にダンスを止め、笑顔で顔を見合す。ダンス全体がジェリーの陽気な求愛を表し、踊るのが楽しい冒険なのだと伝えるジェリーの本質を明らかにする。そのためデイルも、一緒に踊るダンスの楽しさに誘われる。このダンスで二人はダンスを愛する人間として共感を分かち合う。これを新作舞台のキャストのジェリーとデイルは、恋のドラマを描くダンスの巧みさによって観客を舞台に引きこんだ。

2014 年の来日公演『雨に唄えば』(Singin' in the Rain) も映画の舞台化に苦心のあとが見られたが、『雨に唄えば』よりこの映画のオリジナル曲は、数が少ない。そこで、数多くのバーリンの曲から適切な曲を 6 曲加え、舞台を豊かにした。

トーキー時代に入ったハリウッド映画は、ブロードウェーから多くの作品、題材と曲を手に入れ、ミュージカル舞台を模倣した。だがブロードウェーのプロの集団が手がける創造的なミュージカル舞台に比べ、機械を使う技術者による映画は、利益追求の工場と蔑視された。それゆえ、舞台の映画化はあっても、映画の舞台化はまず、なかった。その中で映画 TOP HAT は、バーリン作曲作詞のオリジナル曲で色どられ、歌とダンスにその音楽を具現化するアステアの天才のために、当時のブロードウェー舞台に遜色ない質をもっている。それでも映像技術で本物のように見せればよい映画と比べ、舞台化では本物の俳優が実際に歌い踊り、生の装置の中で現実に演技をしなければならない。そこで、この舞台化では、「ピコリーノ」の挿入場面を変えただけでなく、新しく挿入された曲を巧みに配置することで、音楽・ダンスに優れた演劇的構造が具現化された。1、2 幕とも、開幕、終幕のダンスが華やかで、見事な群舞となっている。まず新作舞台 1 幕ではブロードウェーの有名ダンサーがロンドン公演に行くという物語に沿って、ブロードウェーでのショウで始まる。アステアの看板曲 "Puttin' on the Ritz" (リッツ・ホテルに泊まれば) を大勢の男女ダンサーたちと踊る群舞で観客を圧倒する。"Top Hat" 同様の白黒の衣装を変更し、舞台のジェリーはヴォードヴィルに典型的なカラフルな衣装を着、群舞のダンサーたちは派手な金ピカの衣装でアメリカ的である。1 幕の最後はロンドンの舞台で、前述の白黒の正装で踊る男性達の "Top Hat" のショウである。この公演の直前ヴェニスに逃げたデイルを、ジェリーはホレスとともに追いかける。その飛行機の空中の仕掛けが楽しい。そして 2 幕開幕は、海を背景にした舞台でホテルの人々の華やかなダンス場面 "Piccolino" となる。最後は、"Let's Face Music and Dance" (アステア主演の『艦隊を追って』Follow the Fleet, 1936 から) というバーリンの名曲に乗せた群舞で、ジェリーとデイルが中央で踊り、二人を囲んで全員燕尾服の男性と淡色で優雅なドレス姿の女性という正装ペアがダンスする。締めにふさわしい美しい曲と華やかな群舞になっている。

主役二人のデュエット・ダンスは見せ場であっても、ダンスの前の歌はアステアが歌うのがパターンであった。が、主役が当然歌わなければならない舞台では、デイルの歌が必要である。ジェリーに誘惑的に迫るコミックな "Wild about You" (『ルイジアナ買収』Louisiana Purchase, 舞台 1940 から)

と、ヒロインが失恋したと思って歌う定番の感傷的なバラード "Better Luck Next Time" が入った。

さらに、脇役マッジとホレスの 2 重唱「あなたのここが嫌い、あそこが嫌い」と言い合い、「でもそれ以外は愛している」と歌う "Outside of that, I Love You"（『ルイジアナ買収』 から）が、いつも夫婦喧嘩している二人のコミックな仲直りを表し、観客が楽しめる場面となる。ジェリーの恋敵のイタリア人ベッディーニには、これも『ルイジアナ買収』 から "Latins Know How" というコミックな歌が与えられた。

こうした挿入歌とダンスにより、映画よりショウアップされ、見ごたえのある場面が続く。

日本公演の主役アラン・バーキト（Alan Burkitt）は、ロンドン公演でジェリー役の代役俳優だったが、筆者が観劇した折には、睡魔の場面で影絵の砂のダンスを踊っていた。数多くのミュージカル舞台で主要ダンサーとして踊るが、アステアの娘エヴァがアステアのタップを受け継ぐと賞賛したことから、全英ツアー公演で初めて舞台の主役を掴んだ。その意味で、初演オリジナル・キャストより、この主役に相応しい。ダンスは折り紙つきで、Strictly Come Dancing 振付の経歴をもつ（注)。アステアより背が高く、手足も長く、社交ダンスでは優雅であり、ジャズダンスでは足取り軽くタップを踊る。アステアを理想にしていると言うだけに、申し分ないダンスで細身の姿と品のよい感じがアステアに似ていた。またデイル役シャーロット・グーチ（Charlotte Gooch）もロンドンで、2012 年 12 月からデイルを演じた女優である。ショウでの主要ダンサーとミュージカルのダンス役の女優としての経歴をもつ。アステアにあわせ小柄で細身のジンジャー・ロジャーズよりはるかに大柄で、ダンサーとしても華やかで主役にぴったりだった。1930 年代流行を意識したデザインの数々の衣装やヘアスタイルが美しさを際立たせていた。主役二人のダンスの旨さはもちろんだが、脇役まで驚くほどに見事なダンスで、アンサンブル、群舞がすべて見ごたえがあり、一斉に踊る群舞は心を高揚させるものだった。

装置は、映画に倣いアールデコの簡素な装置だが、衣装とともにモノクロ映画の画面より上品な淡色系で優雅になり、時代の現実感を示した。音楽は、打楽器のきいたブロードウエー式と違い、クラシック音楽のようなオケが劇場に広がる柔らかな響きで、優雅なダンスにもぴったりだった。

オルドウィチ劇場公演では、観客の熱狂にも拘わらず、批評家の反応は賛否両論だった。ロンドン最高の演劇評論家と看做されるガーディアン誌のマイケル・ビリントン（Michael Billington）が「音楽はすばらしいが、演劇としてストーリーがくだらない」("great songs, daft book") と批判する一方、過去 25 年間において最高の演技、振付、編曲、衣装の舞台で、生涯に 1 度しか出会わないような見事なミュージカル（The Sunday Telegraph）と言う最高の評価も受けている。映画は大恐慌の不況からの逃避として、富裕階級がロンドンやヴェニスで遊ぶ華やかな生活という空想を描く、ばかばかしいほどとっぴなプロットの脚本に基づいている。アステア映画の全脚本に関わる脚本家アラン・スコット（Allan Scott）は、そのたわいもない物語を洗練された都会喜劇の対話で飾っている。舞台でもそれが生かされ、舞台演出家マシュー・ホワイト（Matthew White）による舞台台本は、観客の楽しめるライト・コメディとなっている。確かに演劇的重厚さは無いが、数々のダンス場面が人間関係を描いてドラマを成立させている。ダンスを楽しみ、ダンスに生きるジェリーの人間

性がバーリンの名曲とみごとなダンスにより観客に感動を与え、魅力的なミュージカルとなる。ジェリーとデイルにとっては、ダンスし、歌うのが二人の生きる本質で、人生を変えるものである。

この公演の製作者・創造スタッフは、劇場に来た観客を楽しませ、幸せにする1930年代のミュージカル・コメディの舞台を復活しようとしたので、その点で大成功である。公演の目的を果たし、オリヴィエ賞獲得に繋がった。最後に、このすばらしい来日公演を企画した梅田芸術劇場に感謝したい。

(注) 初演キャストは、Strictly Come Dancingという毎週土曜夜のBBCの人気テレビ番組の2008年の優勝者Tom Chambersがジェリーを踊り、デイルは2008年The Sound of Music再演版(ウエスト・エンド版アンドリュー・ロイド・ウエッバーの制作演出)のマリアを演じオリヴィエ賞候補にもなったSummer Strallenであった。

この番組Strictly Come Dancingは、1949年から続くCome Dancingというダンス番組が起源で、1992年の映画『ダンシング・ヒーロー』(Strictly Ballroom)の公開後、番組名と映画名を合成してStrictly Come Dancingという番組が生まれた。2004年からはプロ・ダンサーとタレントなど有名人(ダンスはアマ)がペアで各種ダンスを踊る競技コンテストとなり、土曜夜のゴールデンアワーに放映され、結果発表は日曜夜という人気番組である。またこの形式がアメリカにも輸出されている。この番組で有名になったメンバーが踊るStrictly Come Dancing Liveというツァー公演があるが、2015年には、全米の番組優勝者やスターから構成されたメンバーで、全英ツァーが行われた。音楽はアーヴィング・バーリン、ガーシュウィン、ジェローム・カーン、コール・ポーターなどのアステアが踊ったミュージカルの曲が使われ、人気ナンバーを幾つもミュージカルの1場面のように歌い踊る公演のようである。こうした事実は、イギリスにアステアのようなダンスを称賛する人々、踊ってみたい若者、演劇界の俳優たちが、育っていることを示す。日本でも、周防正行監督の『Shall Weダンス?』の公開後、こうしたダンス・コンテストのテレビ番組があったことを思いだすが、ダンスが生活の一部である英米との違いか、長く続かなかった。初演ジェリーのトム・チェインバーズ以外にも、この公演TOP HATのプログラムによると、Strictly Come Dancingのコンテストに出たとか、番組にプロとして出演などの経歴をもつ俳優が多く、Strictly Come Dancingが、ロンドンのミュージカル界に重要な番組とわからせてくれる。 (玉崎　記)

⑩演劇『おふくろ』　11月7日　[A]13：30 [B]16：30　緑文化小劇場

田中千禾夫・作　本島勲・演出　劇団みどり　第3回公演

田中千禾夫作『おふくろ』(昭和8年)を見た。演出はαの会代表で、緑文化小劇場の芸術監督をも兼ねる本島勲氏。劇場に早く到着したので、劇団の方を通じて本島氏にお願いし、開演前にいろいろ質問することが出来た。

さて、わたしから本島氏への最初で最大の質問は、本島氏はこれまで、ピンターを中心にいわゆる

不条理演劇を演出・上演されてこられたわけだが、そのことと今回田中作品を取り上げたこととの関連性についてであった。

わたしとしては、ベケット以来ピンターも含めて、いわゆる不条理演劇作家たちによっていわば「壊されてしまった」〈演劇〉を回復するという意図（つまり、"beyond the absurd"）でこの田中作品を取り上げたという答えを期待したが、必ずしもそういうことではなく、本島氏の演劇人生の最初の思い出深い作品であるが故にこの作品を選ばれたと言うことであった。

本島氏は、不条理演劇と田中作品との差はあまり意識されてはおられないようであった。いい演劇であることに両者に変わりはないと思っておいでのようであった。

もちろん、この作品が、現代の劇作家の作品と比べて、台詞も劇の構成も問題なく優れた作品であるということは、この作品を選ばれた大きな理由の一つであろう。

わたしはすでにチケットを事前に買って持っていたのだが、さらにご招待チケットもくださり「今日はＡ組とＢ組と２回公演をするので、両方を見比べてみてください」と言われ、ありがたくそのようにさせていただいた。

さて、劇内容は、就職を控えた大学生の息子と期末試験を控えた女学校生の妹、そして夫を早く失い、女手一つで二人を育ててきた気丈夫ではあるが心配性で心細がりやの「おふくろ」の物語。その息子が自分の知らぬ間に、家庭教師をし、さらには、つてを頼って名古屋の銀行に就職先を見つけてしまう。息子の就職は東京でと決めていた「おふくろ」は驚いて、多少の恥ずかしさを含みつつ、「息子がいなくては生きていけない、娘は寄宿舎に入れおいて、わたしも息子について名古屋に行くわ」と言って幕になる、という単純なもの。

わたしは同じ演劇を２回続けて見るということは初めての経験だが、演者のほんのちょっとした「間」の取り方や「言い回し」の違いによって、こんなにも同じ演劇が違ってくるものかと驚く瞬間がいくつかあった。その一番いい例は、エンディングで、「おふくろ」が息子の就職の話を聞いておろおろしながら、「わたしも息子について名古屋に行くわ」と言うタイミングである。

［A］組はタイミングよく「おふくろ」の台詞が語られ、かすかな笑いを誘ったが、［B］組はそのタイミングがとれず、笑いがとれなかった。

「演劇」はほんとうになまものである。一回一回が違った芝居になる。今回笑いを取った［A］組でも次回どうなるかは分からない。そのあたりが映画とは決定的に違う点であると思う。

演出家本島氏のはからいで、まさに「演劇」の本質を体験するいい経験をさせていただいた。

（磯野　記）

⑬1『Mack & Mabel』　９月３日　観劇とチチェスター・フェスティヴァル劇場

ロンドン滞在の間に、チチェスター・フェスティヴァル劇場で、『マック・アンド・メイベル』（Mack & Mabel）を観た。ここ３年間のロンドンでの観劇の結果、オリヴィエ賞を受賞する優れた名作舞台がチチェスターで新演出上演され、やがてウエストエンドに移転公演されることを知った。

そこで、チチェスターでどう舞台が作られるのか、チチェスターはどういうところなのか、実際に行ってみたくなった。今回チチェスターでの観劇がかなったので、チチェスター劇場と公演を簡単に報告したい。一般発売後の予約であったが、幸いにも第1列の中央寄り左の席が残っていて、ネットで購入できた。

チチェスターは古代ローマの城壁に囲まれた小さな町で、昔からの古い建物、石畳の通り、そして美しいチチェスター大聖堂が、古都の雰囲気を見せている。ロンドン・ヴィクトリア駅から、英国鉄道でサセックス方面へ向かい、1時間でチチェスターに到着した。駅から15分ぐらい歩くと、North St北端の城壁に着き、地下道を抜けると、出口がオーランド公園であり、その一角に広い駐車場に囲まれたチチェスター・フェスティヴァル劇場がある。劇場はメイン・シアターのチチェスター・フェスティヴァル・シアター（1206席）と、別棟で向かい側に建つ小劇場ミネルヴァ・シアターの(230席）の二つがあり、今回大劇場だけでの観劇であったが、劇場も公演も良かった。

フェスティヴァル・シアターは、四方がガラス張りの建物に、大きな庇が張り出した箱型の屋根という現代的な外観の大きな劇場である。劇場の入り口を入ると、公園を見晴らす広々としたカフェや小さな売店をもつ3方がガラス張りの立派なホワイエであり、奥は劇場の扉に続いている。劇場の内部は大きな円形劇場風の造りである。ただし客席は舞台を囲み擬似半円形を描いて造られ、舞台奥の部分には客席は無く、舞台の背景壁となっている（裏にオケ席や楽屋があると思われる)。奥行きの深い半円形の舞台は幕もなくオープンで、日本でならメインでない小劇場のような造りで、天井や壁の構造がむき出しで見える。ただし座席や通路、ホワイエなどは赤いカーペットで劇場の内装である。舞台両端を囲む両袖の客席は、舞台傍から始まる階段状の座席が上へと続く造りである。袖以外の客席は円形劇場の座席風に舞台正面を囲んで階段状に造られた座席で、ホワイエへの扉から舞台へ通じる客席通路は、俳優達の入退場にも使われる。全体が階段状の座席なので、どの席からも非常に舞台が近い。今回、前列1列目なので、舞台とは幅の狭い通路と、舞台へ昇る3段の円形状階段だけで、舞台の真近かであった。今回の公演は、サイレント映画からトーキーに移る時代（ジャズ・エイジ）が背景なので、オーケストラの人員は15名でジャズバンドと言える編成であった。

チチェスターは名作の新演出で評判であるが、今回の『マック・アンド・メイベル』はそれほど有名作品ではない。この公演もジェリー・ハーマン作詞・作曲のミュージカルというより、『レ・ミゼラブル』ロンドン初演でマリウス役を演じたマイケル・ボール（Michael Ball）の出演が宣伝された。しかし、『マック・アンド・メイベル』の作詞・作曲家であるジェリー・ハーマンは、ブロードウェーで1500回以上の人気公演を3作も書いたという唯一の作家である。ただこの作品は1974年ブロードウェイ初演で、作品賞を含め8部門でトニー賞候補にあがったものの、どれも受賞できなかった。1964年に『ハロー、ドリー』、1966年に『メイム』、1983年に『ラ・カージュ・オ・フォール』とトニー賞作品賞を獲得した彼にしては不本意だったろう。しかもハーマンがお気に入りの曲というだけに、このミュージカルは美しい、あるいはコミックなメロディにあふれている。一方、これらの成功作を見ると、ジェリー・ハーマンが軽快で明るいミュージカル・コメディを好み、誰もが口ずさみやすい耳に残る流行曲を作るのが、得意だったと知れよう。ハーマンは黄金時代のミュージカル・コメ

ディを受け継ぐ、バーリン、ポーターのように作詞・作曲を一人でこなす作家である。ウィットのある歌詞と親しみやすい美しいメロディで観客に愛され、しかも山場で華やかに盛り上がるヒット・メロディを書いてきた。しかし、この『マック・アンド・メイベル』が初演された頃は時代の転換期で、大衆の好みであるロック音楽による『ヘアー』が登場した。ソンドハイムの新しいコンセプトで作られた『日曜日はジョージと公園で』が、次のヒット作『ラ・カージュ・オ・フォール』とトニー賞を争ったので『ラ・カージュ』はブロードウェーのミュージカル・コメディ最後の成功と言える。

失敗作として再演もされない『マック・アンド・メイベル』は、意外にもイギリスでは、1981年の初演以降、数年おきに何回も大小の公演で再演され、今回のチチェスターのジョナサン・チャーチ(Jonathan Church）による新演出は、イギリスでの再演6回目となる。

『マック・アンド・メイベル』は、実在の人物をモデルにした伝記の体裁をとっている。サイレント時代の映画監督、マック・セネット（Mack Sennett）と彼の主演女優であったメイベル・ノーマンド（Mabel Normand）のすれ違う恋物語がプロットとなる。当然、トーキーやカラー映画へと発展していく映画産業と、サイレントの衰退を背景にしている。舞台は、1938年、昔のスタジオに戻ったセネットが思い出に浸り、1911年のサイレント映画の栄光を振り返る場面から始まる。

サイレント映画のスタジオに弁当の配達に来たメイベルが、素晴らしいコメディエンヌになるとマックに見込まれるという女優への変身は印象的だったが、実はフィクションだという。仕事熱心なマックは、まもなく自身の会社キーストーンを設立し、ドタバタ喜劇で名声を得た。マックを恋するメイベルは、充分に愛されてはいないと知りながら、愛人になる。だが「君にバラの花束を贈ったりしないよ」("I Won't Send Roses"）とマックは歌い、結婚を望む彼女の気持ちに応えない。その上喜劇女優でなく、演技派女優になりたいという彼女の希望を無視し続け、自分の愛する2リールのサイレント映画を作り続ける。とうとう、メイベルは別の映画監督のもとへと去り、その監督テイラーの恋人になる。それでも、マックは明るく「水着の美人」を撮り、大成功する。

2幕始めで、メイベルはマックのスタジオに戻り、皆に大歓迎される。マックは彼女のために本格的な映画を1本撮るが、次にはやはり自分は喜劇だと「キーストーン・コップス」を撮り、さらに大成功。再びメイベルはテイラー監督のもとに去り、彼と欧州への船旅に出発する。テイラーはメイベルが実はまだマックを愛していると気づき、元気を出せとヘロインを勧める。マックのスタジオでは歌い踊るトーキーでの成功が続く。一方、麻薬中毒になったメイベルは、テイラーの殺人容疑をかけられ、醜聞となる。メイベルが大切な人だとやっとマックが認識し、彼女のもとに行こうと思った時、メイベルが死んだと知らされる。「でも、ミュージカルなんだから、幸福な結末を約束するよ」と歌うマックの歌で幕が降りる。

映画産業の歴史と裏話は興味深く、特にキーストン・スタジオの仲間として、将来の喜劇映画の名手フランク・キャプラが修行時代で、メイベルにマックのもとに帰ってやってと勧める役柄だったのが面白かった。ミュージカル･コメディの楽しく笑わせるエピソードは数多く、さらに初演当時は流行遅れの音楽もハーマンだけあって素晴らしく、マイケル・ボールが、美声で魅力的な歌を聞かせた。だがマック・セネットが自分の持ち味はコメディだからとこだわり、メイベルとすれ違ったように、

ハーマンも到底コメディでないプロットのミュージカル・コメディを作ろうとしたのが、成功しなかった一因ではと思えた。一方で、主筋の恋人関係が結ばれずに終わるのは、サイレント映画の失墜とともに、二人の魅力的人物像から哀感のにじむものだった。こうした存在感ある人間ドラマが、イギリスで愛され、再演される理由と思われる。

セネットを演じるマイケル・ボールは「レミゼ」の時より太り中年男となり、主人公恋人としてはどうかと思ったが、歌いだすと見事で、またその体格の割りにサイレント映画の、あたふたと動くキーストン・コップや、ショウガール達の演出をやってみせる演技もしっかりこなしていて、感嘆した。またメイベル役の女優はアメリカ人であり、いかにもアメリカ人らしい元気な自己主張のはっきりした明敏な娘を演じ、マイケル・ボールと比べ中年男と若い娘という対比が明瞭にされたのが良かった。

それぞれのエピソードは巧みに演出され、ベテランのミア（Stephen Mear）振付のダンスや歌も文句なしで楽しませた。これは古いブロードウェー作品を新たにドラマ的に優れた舞台にしようと目指すチチェスターのやりかたを納得させるものだった。もちろん、名演出家で現在のチチェスター芸術監督のジョナサン・チャーチによることも、見事な舞台の一因である。ただ、彼の芸術監督の任期が終り、翌シーズンにはオーストラリア、シドニーの芸術監督に就任予定と発表されただけに、この舞台が来夏ウエストエンドに凱旋できるかどうか不明である。慣例通り、ウエストエンドに移転し、もう一度観劇できることを楽しみにしている。（玉崎　記）

⑬⓪ 2015 年春ロンドン（＆ストラットフォード・アポン・エイヴォン）演劇事情

昨年（2014 年）は、John Webster の The Duchess of Malfi が Shakespeare's Globe 座の敷地に新たに建設された Sam Wanamaker Playhouse での柿落しとして上演されたのを皮切りに、ロンドンの 2 つの劇場、Questors Theatre と New Diorama Theatre でも、The Duchess of Malfi が上演され、ストラットフォード・アポン・エイヴォンでは Royal Shakespeare Company が彼のもう一つの代表作 The White Devil を上演した。さらには BBC テレビが 2 夜に亘って Webster の特集番組を放映し、広くイギリス人の間に Webster と彼の作品とを紹介したこともあって、Webster にとって画期的な 1 年となった。Webster の次には John Ford が取り上げられるのではないかと期待していたところ、まず、昨年の 10 月末から 12 月にかけて、Sam Wanamaker Playhouse で 'Tis Pity She's a Whore が上演され、今春には同じ劇場で The Broken Heart が、ストラットフォード・アポン・エイヴォンの Swan 座で Ford のもう一つの代表作 Love's Sacrifice が上演された。'Tis Pity はこれまでしばしば上演されてきたが、滅多に上演されない The Broken Heart と Love's Sacrifice が同じ時期に取り上げられることで、期待どおり Ford の復活が予感され、どうしてもこの 2 つの上演を観たくて、短時間であったが、イギリスを訪れた。

The Broken Heart が前回上演されたのは 21 年前、1994 年の RSC によるものであった。筆者はこの時の上演を観る機会に恵まれなかったので、今回がこの作品の初めての観劇であった。作品を読んだときは、煽情的な場面ばかりが印象に残ったが、劇場で観ると、煽情的な劇というより、むしろ心

理的な劇であると思った。Sam Wanamaker Playhouse の閉鎖的な空間が登場人物たちの複雑な心理へと観客の意識を向けさせるのだと思う。この作品の要諦は、夫にと心に決めた Ithocles を殺害された王女 Calantha が「傷心」ゆえに絶命することのリアリティーを、兄 Ithocles によって恋人 Orgilus と別れさせられ、嫉妬深い Bassanes と結婚させられた Pentheа が、この結婚を続けることは Orgilus に対して不義を働くことになると信じ、食を拒んで餓死することのリアリティーを、また、Pentheа を失い、その原因となった Pentheа の兄 Ithocles を、一旦は赦すと思わせておいて、殺害し復讐を果たした後、自ら選んで失血死する Orgilus のリアリティーを、観客に納得させられるかどうかだが、登場人物の心理を強調した Caroline Steinbeis の演出は観客に登場人物たちの死を納得させることに成功している。その成功にはこの劇場の構造が深くかかわっていると思う。もし Shakespeare's Globe 座の青天井の舞台で演じられたら、登場人物の心理よりは、彼らの行動に観客の関心が集中して、全く異なる演劇体験になったに違いない。

テキストからは思いつかない演出上の工夫がいくつか見られた。女性演出家ゆえであろうか、Steinbeis は登場する三人の女性に焦点を当てているように思えた。開演冒頭、三人の女性が花嫁姿で舞台に現れる。Ithocles との結婚が叶わなかった Calantha、兄 Ithocles の強制によって Orgilus との結婚が叶わず、不本意な結婚生活を余儀なくされている Pentheа、Ithocles の親友 Prophilus との結婚の許しを父と兄 Orgilus から得て婚約したものの、Orgilus による Ithocles 殺害事件のために、結婚が成就するかどうか不安を感じる Euphranea の三人である。この三人の女性それぞれの結婚への思いを前面に出す演出がとられていた。花嫁姿の三人が退場すると、舞台にフードを被った数名の男が現れ、そこに現れた仲睦まじい二人の恋人を襲い、女性を捕えて、無理やり舞台下の奈落へと連れ去る。テキストには書かれていない、Orgilus と Pentheа が暴力によって阻止される瞬間が、視覚化される。劇の最後、Ithocles の亡骸が置かれた祭壇の前で、亡き父の跡を継いで女王となった Calantha は、これからの国政の担い手を指示した後、「傷心」のあまり命尽きる。この時、Calantha の隣に、死んだはずの Ithocles が寄り添い、結婚はできなかったが、二人でともに死出の旅に赴くことが暗示される。

テキストでは Calantha の死だけに 'broken heart' という表現が使われているが、Calantha だけでなく、主要な登場人物たち、Pentheа、Orgilus、Ithocles、Euphranea、Prophilus など、誰もが何らかの意味で辛い 'broken heart' を体験している。その意味ではこの作品を The Broken Heart よりは The Broken Hearts と名付けてよいのではないかと、今回の上演を観て感じた。この劇場で上演することによって The Broken Heart が心理劇として現代に蘇ったと言ってよい。

もう一点、Pentheа の嫉妬に狂う夫 Bassanes が存在感のある人物として描かれていた。他の作家も描くよくあるタイプの人物だが、Owen Teale の好演もあって、特に印象に残った。Shakespeare が造型した人物の中にも、主人公ではないのだが、役者が何故か演じたがる脇役、たとえば、Twelfth Night の Malvolio、As You Like It の Jaques、Romeo and Juliet の Mercutio などがいるが、Bassanes も同じ部類に属する人物かもしれない。1962 年、Chichester Festival Theatre がこの劇を上演した時、Bassanes を演じたのは Laurence Olivier であった。

翌日はストラットフォード・アポン・エイヴォンに移動して、Swan 座でマチネーの Love's Sacrifice を観た。前夜は The Broken Heart を観てかなり興奮したので、この日も大いに期待して劇場に向かった。この作品がプロの劇団によって本格的に上演されるのはフォードの時代以来、おおよそ 400 年ぶりだという。それほど長い間「忘れられていた」劇を上演するにはそれだけの狙いがあると思われた。劇場に入ると、舞台の上には、何本ものアーチの骨組みだけが、手前は大きく、舞台奥へ行くほど小さく、パースペクティヴ状に組み立てられていて、教会の内部を思わせる。舞台奥はスクリーンになっていて、舞台上で展開する状況に応じて、時に具象的な映像が、時に抽象的な映像が映し出されて、舞台の雰囲気を醸成する助けをしている。時代は現代に移されていて、登場人物たちも現代の服装を纏っている。この舞台装置に終始違和感を感じた。何故教会の内部なのか、何故スクリーンに映像を映し出さなければならないのか。そのようなことを感じながら劇を観ていると、前夜の Sam Wanamaker Playhouse の舞台では暗い閉塞的な雰囲気の中で、登場人物たちがその胸の内を語る言葉に集中することができたのに、この公演ではそれができない。理由の一つにこの舞台装置があるのではないかと思った。

'Tis Pity She's a Whore には Shakespeare の Rome and Juliet の残響があるが、この作品は明らかに Othello の影響下で書かれている。Pavy の若き公爵は狩りに出たとき偶然目にした Bianca に一目惚れして結婚する。外国から戻った公爵の友人 Fernando は公爵夫人を紹介されるや、たちまち公爵夫人に惹かれ、彼女に求愛する。はじめは拒んでいた公爵夫人も次第に Fernando に心を開くようになる。それを察知したのは、公爵の妹で、最近未亡人となった Fiormonda で、彼女は Fernando に接近しようとして拒まれたために、復讐をはかるべく、Bianca と Fernando の関係を、手下 D'Avolos を使って、兄公爵に密告し、彼の嫉妬心に火をつける。公爵を Othello、Bianca を Desdemona、Fernando を Cassio、Fiormonda と D'Avolos を Iago と置き換えれば、この作品は Ford 版 Othello と言ってよい。公爵は妻 Bianca と親友 Fernand の間に不貞の関係があったと信じて二人を殺害するが、殺害後にその判断が誤っていたことを知り、自ら命を絶つ。プロットは Othello とよく似てはいるものの、この作品には、Othello から感じ取れる悲劇性も人物の深さもない。Bianca と Fernando は、公爵の留守に、Bianca の寝室で、しかも Bianca は夜着姿で、愛の言葉を交わしているところを見つかって逮捕されてしまうのだが、公爵は、二人の間には少なくとも肉体関係はなかったと言って、二人を殺害したのは間違いであったと判断する。この判断に観客が納得するかどうかがこの作品の最大のポイントだが、今回の上演を観る限り、観客を説得することはできなかったと思う。Ford には Shakespeare にはないサブ・プロットが二つ加わってはいる。三人の女性に子供を産ませる好色漢 Ferentes のプロット、かつて Fiormonda に言い寄ったために追放されたがフールに変装して帰国し彼女に再び接近しようとする Roseilli のプロットである。しかしこの二つのサブ・プロットは、メイン・プロットとの関連が感じられず、メイン・プロットを深める働きを果たせていない。RSC の芸術監督 Gregory Doran は、17 世紀に書かれ、これまで忘れられてしまっているが、現代の観客に訴えかける力のある作品を捜し出して、上演するという計画を構想し、この作品を選定したと伝えられているが、残念ながらこの作品を現代に蘇らせることはできなかった。大

方の劇評でも評価されず、「長い間上演されなかったのはそれなりの理由がある」(Financial Times)とか「観る価値は、ある。しかし、わざわざ観に行く価値はと言えば、ない」(Daily Telegraph)といった辛辣な劇評もあった。

その後、主要な劇場で、2015年末までに、Fordの作品が上演される予定はない。昨年末の 'Tis Pity She's a Whore、今年春の The Broken Heart と Love's Sacrifice の上演をきっかけに2015年がFordにとって期を画する年になるのではないかという予感はどうやら現実のものとはならなかった。

マチネーで Love's Sacrifice を観た日の夜、Royal Shakespeare 劇場で Arthur Miller の Death of a Salesman を観た。この作品を観ることも今回のイギリス訪問の目的であった。Antony Sher が主人公 Willy Loman を演じることになっていたからである。Sher は昨夏、Henry IV Part I & II の Falstaff を演じて大好評を博したが、連続の RSC への登場である。しかも今年は Miller の生誕100周年、それを記念しての公演である。Death of a Salesman を RSC が上演するのは今回が初めてであるという。演出は芸術監督の Gregory Doran。素晴らしい舞台を観られるのではないかと大いに期待した。

開幕冒頭、口髭を蓄えた、背の低い、小太りの男が両手に重そうなスーツ・ケースを持ち、重い足取りで、舞台に登場する。Sher 演じる Loman である。これまで Sher の舞台は何回か観ているが、現代人を演じる Sher を観たのは今回が初めてである。そのうち Loman が台詞を語り始める。何かが違うと直感した。はじめは、昨年観た Falstaff の自由奔放なイメージとあまりにかけ離れているからだと思ったが、そうではない。Sher は独特な台詞回しで台詞を語るが、Shakespeare 劇では、その台詞回しがごく自然に耳に入ってくるのだが、セールスマンは Sher のようには語らない。それが違和感の原因だと気付くのに時間はかからなかった。セールスマンがセールスマンに見えないのだからなかなか劇の世界に入っていけない。Miller はこの作品で、現在の中に過去をフラッシュバックさせるという優れた技法を採用しているが、フラッシュバックされる過去の様々な出来事、たとえば、息子たちがまだ小さかった頃、父親と息子たちが仲良く興じていた思い出、息子に情事が露見してしまうボストンのホテルでの出来事などを演じる場として、舞台前方のほぼ全体が使われる一方、舞台奥に骨組みだけの Loman の家の寝室が配される。35年前、この地に家を建てたころは、家の周りは空き地だらけで、子供たちとも自由に遊べ、野菜を育てることもできたのに、今や周囲は高層建築に囲まれ、息苦しいほどの閉塞感が漂っている。それが Loman の現在置かれた精神的、経済的状況を象徴的に暗示しているはずなのに、舞台のつくりはそれを暗示しえていない。客席から見ていると、舞台前方の張り出し部分に広い空間があって、そこで演技が展開されると、この劇の持つ逼迫感が伝わってこない。Loman はセールスマンとしてアメリカン・ドリームを追い求めたものの、結局は夢を実現できなかった男として Miller は描いている。アメリカン・ドリームならずとも自らの夢を実現できずにいる、あるいは夢さえ持てずにいる男たちが現代には溢れている。「それでも俺はウィリー・ローマンだ」と己の自負を語るローマンが、息子たちに保険金を残そうと最後に自ら事故死を選ぶとき、厳しい現実を生き抜く力を、現代の観客に与えてはくれない。Sher は2016年の RSC シーズンに King Lear を演じる予定である。自己を十分には認識できない人物として Lear と

Loman には共通点があるが、Loman が最後まで自己を発見できなかった一方で、Lear は狂気を経て、自己覚醒に至る。Sher がどんな Lear を見せてくれるか楽しみである。

この春観た 3 つの作品では、劇場そのものの空間あるいは舞台の空間のありようによって、それぞれの上演の成否が左右されていたように思う。閉鎖的な劇場空間を持つ Sam Wanamaker Playhouse での The Broken Heart が成功したのに対して、Death of a Salesman のようないわばリアリスティクな現代劇を、観客席への 2 本の花道を持った張り出し舞台で上演することが適切であるかどうかが問われていると思う。Shakespeare をはじめエリザベス朝、ジェイムズ朝の劇には舞台装置が必要ではないのに、現代劇は何らかの舞台装置を必要とすることと関係があるかもしれない。

（酒井　記）

⑬⓪ 2015 年夏ロンドン（ストラットフォード・アポン・エイヴォン）演劇事情

今夏もイギリスを訪れロンドンとストラットフォード・アポン・エイヴォンでシェイクスピア作品を中心に 8 公演を観てきた。昨夏は同じ期間に 15 の公演を観たが、今夏は約半数にとどまった。前号の「演劇事情」に「昨年の夏も感じたことだが、このところ、ミュージカルよりもドラマの上演の方にエネルギーが感じられる」と書いたが、今年はそのエネルギーを全くと言ってよいほど感じ取ることができなかった。一昨年、昨年と比べると様変わりである。ロンドンでは Shakespeare's Globe の Richard II、As You Like It、Much Ado about Nothing、National Theatre の Everyman、Vaudeville Theatre の The Importance of Being Earnest の 5 公演、ストラットフォード・アポン・エイヴォンでは Swan 座の Volpone、Royal Shakespeare Theatre の The Merchant of Venice、Othello の 3 公演を観た。

Richard II は公演期間中 Shakespeare's Globe で上演されていたが、特別に Sam Wanamaker Playhouse で上演される日があり、その上演の切符を入手した。この室内劇場での観劇は今回で 3 回目である。1 回目の The Duchess of Malfi は Upper Balcony で、2 回目の The Broken Heart は Lower Balcony で、今回は Pit で、というようにこの劇場の 3 種類の座席を全部体験した。Upper Balcony からは、天井から下がる 7 つの燭台（一つの燭台にはそれぞれ 12 本のキャンドルがついている）によって、舞台への視線が遮られてしまう。その上、客席数 340 という小さな劇場ではあるが、役者からはやや遠い。Lower Balcony からでも、燭台で視線を遮られることがある。Pit からは、やや舞台を見上げることになるが、障害物はなく、何よりも役者に近い。劇を最も身近なものとして感じることができる。この劇場での観劇は Pit が最善ではないかと思った。Richard II は Shakespeare の歴史劇の中では戦闘場面が少なく、室内の場面が多い。広い空間を想定しなくて済む劇である。その意味では、空間の広い屋外劇場ではなくて、この室内劇場での上演に適していると思う。この日特別にこの劇場で上演したのは、その方がこの劇を生かせるという判断があったのではないか。演出は最近特に注目されている Simon Godwin。彼は Royal Court Theatre や Bristol Old Vic などで活躍した後、2013 年には O'Neill の Strange Interlude で National Theatre に進出し、昨年は The

Two Gentlemen of Verona で Royal Shakespeare Company にデビューを果たした。今年に入って National Theatre で Shaw の Man and Superman と Farquhar の The Beaux Stratagem を手掛け、さらに Shakespeare's Globe でこの作品を演出した。Richard 2 世を演じたのは Charles Edwards で、彼も最近めきめきと頭角を現してきた。Shakespeare's Globe での Much Ado about Nothing の Benedick 役で、2011 年のイヴニング・スタンダード紙の Best Actor にノミネートされた。演出の Godwin とは Strange Interlude で一緒に仕事をしている。10 歳で王位を継承させられ、専制と寵臣政治によって国民の信頼を失い、退位を迫られ、最後には暗殺されてしまう Richard 2 世が、生身の人間としていかに苦悩の人生を歩んだかがこの劇のテーマである。王位を失ったときの Richard の年齢は 32 歳、演じる Edwards は 47 歳、Edwards の演技が常に堂々としていて、人間的にも、政治的にも未熟な若き Richard を十分には描き切れていないと感じた。Godwin は劇の冒頭に、テキストにはないシーンを加えている。10 歳の Richard が小さな馬の木像を手に舞台に現れるが、その木像を手放して、王冠を被り、王となる。必要のないシーンだと思ったが、Richard が退位させられ、ポンフレット城に幽閉されると、若者が登場して、囚われの Richard を慰めようと、劇冒頭に手放したあの木像を手渡す。政治的闘争など何も知らずに木像相手に遊んでいた Richard が無理やり王位に就かされ、再び政治的闘争などと何も拘わらない生活に戻っていったことが、この馬の木像のやり取りによって暗示されている。Godwin は無垢なリチャードが政治に翻弄されていく様を観客に納得させるように見事に描き、優れた舞台を作り上げた。

Sam Wanamaker Playhouse で Richard II を観た後、Shakespeare's Globe で As You Like It と Much Ado about Nothing を観たが、どちらとも楽しめなかった。ここ数年、Shakespeare's Globe での観劇にはまずまずの満足感を持っていたが、今年はむしろ不満を感じながら劇場を去ることになった。As You Like It では、劇の最初に、必要とも思われない、Orlando と Oliver の父親の埋葬の場面が付け加えられたり、Rosalind が不必要なほど反抗的に造型されていたり、劇最後の結婚の場面に登場する婚姻の神 Hymen が男だったり、Jaques がコミカルな人物に造形されていたり、観ていて、なぜそうするのだと考えさせられる場面が多く、劇に入り込めない。最近は上手になったなと思っていた役者たちの演技もこの公演では感心しなかった。それにもまして、この劇にとって欠かすことのできない森のイメージがまったく喚起されなかった。Much Ado about Nothing はさらに悲惨だった。役者 8 人で 18 の役柄を演じていた。同一の役者が別の役を演じるときには帽子を被ったり、小さなマスクをつけたりして、別の役を演じていることを示す。一人の役者がいくつかの役を演じることになるので、所々で誰が誰だかわからなくなって、混乱をきたす。どの役者も楽器をこなし、演奏したり歌を歌ったりして、この劇の祝祭性を出そうとするが、一向に盛り上がってこない。もっとも Shakespeare の時代の劇団も、限られた数の役者ですべての登場人物を演じたのだから、この公演のようなやり方が当時としては普通だったのだろうが、何とも楽しめない公演であった。あとになって分かったのだが、この公演はワールドツアーに出るということで、役者と舞台装置を可能な限り少なくしたのだそうだ。Shakespeare 当時の一つ一つの劇が果たして最低何人の役者で上演可能なのかの研究が最近かなり進んできているが、最低数の役者で演じられるとき、その劇が観客によってど

うとらえられるのかは、別の問題として考えなければならないのではないだろうか。この公演を観ながら強くそう感じた。

この 10 年間、初代 Mark Rylance の跡をついで Artistic Director を務めていた Dominic Dromgoole が 2016 年 4 月に Shakespeare's Globe を去ることになり、今年の初めから公募による後継者探しが行われていたが、後継者が決定した。現在コーンウォールを地盤に活躍している劇団 Kneehigh の Joint Artistic Director, Emma Rice である。彼女はこれまで Shakespeare の Cymbeline を演出したことがあるが、その時の劇評は大きく 2 つに割れたという。非常に革新的だと評価された一方で、今までの Shakespeare を破壊したとの批判を受けた。Rice がどのような新しい風を Shakespeare's Globe の舞台に送り込んでくれるか注目したい。

ロンドンで観た劇の内、最も刺激的だったのは National Theatre の Everyman であった。あの中世道徳劇 Everyman だが、桂冠詩人 Carol Ann Duffy が Everyman の骨格を生かしながら全面的に書き換えて、現代の Everyman に作り変えた。演出はこの春、Nicholas Hytner に代わって National Theatre の新しい芸術監督に就任したばかりの Rufus Norris。彼の National Theatre でのデビュー演出という意味でも注目を集めた。開演前から舞台に一人の清掃係のおばさんが、これでもかこれでもかというほど、しつこく、舞台の上のごみを掃き集めている。やがて彼女が実は「神」であることが分かるのだが、現代に生きる Ev（Everyman はみんなからこう呼ばれる）は、成功者として総てを金の力で解決しようとすることを弾劾されるだけでなく、環境汚染に無関心であることをも弾劾されるのが、Duffy の脚本の要点でもあるので、人間に破壊された自然の残骸を「神」が清掃しているという形で劇が始まったのだということが次第に分かっていく。2013 年、Steve McQueen 監督の映画 12 Years a Slave で主役の Solomon Northup を演じて一躍有名になった Chiwetel Ejiofor が Ev を熱演している。開幕と同時に、ロープに吊るされた Ev が天井から舞台へと、あたかも地獄に堕ちるかのように、落下してくる。落ちていく先は彼の 40 歳の誕生パーティーの会場である。成功者である Ev の周りには彼の誕生日を祝おうと多くの人が集まり、ドラッグをやったり、アルコールを飲んだり、強烈なロックに合わせて踊ったりして、いかにも現代のパーティーが舞台上で展開する。その Ev のもとに、大鎌ならぬショッピングバッグを手にした Death がやってくる。神のもとへ行きこれまでの人生の清算を迫る。原作と同じように、Ev は自分を取り巻く様々な人に、例えば Kindred（この作品では両親と妹）や Fellowship などに、弁護を依頼するが、誰からも断られる。最終的には Knowledge に慰めを見出す。人間は自己の本当の姿を知ることができるのは死を目前にした時だと Ev は悟らされる。この作品では Ev が物質主義に毒され、環境破壊に関心を持ってこなかったことも弾劾される。神は言う、「天使たちは地球の残骸を目のあたりにして涙を流している」と。Norris は現代の喫緊の課題を問題にしながら、新しい Everyman の世界の創造に成功した。この作品を見たイギリスの 2 人の友人は「もっと正統的な、伝統的な Everyman を観たい」と言っていたが、現代に生きる我々にはこの Norris 演出の Everyman がふさわしい。二代前の芸術監督 Trevor Nunn がミュージカル仕立ての An Enemy of the People で、一代前の芸術監督 Nicholas Hytner がイラク戦争を想起させた Henry V で、それぞれデビューして、National

Theatre に新風を吹き込んだように、新しい芸術監督 Rufus Norris は現代版 Everyman によって National Theatre の革新性を継承したといってよい。これからの Norris が楽しみである。

Vaudevill Theatre で Oscar Wilde の The Importance of Being Earnest を観た。Lady Bracknell をテレビドラマ Agatha Christie's Poirot の Poirot でお馴染みの David Suchet が演じていることで話題になっていた。Lady Bracknell を男優が演じたのは Suchet が初めてではない。すでに Brian Bedford と Geoffrey Rush の前例がある。Suchet が 46 年に及ぶ役者人生の中で女性役を演じるのは初めてのことであるが、Suchet にこの役を勧めたのは演出の Adrian Noble であったという。6 月 22 日の The Telegraph 紙のインタヴュー記事で、Suchet は「女性役を演じるのは私の役者人生で最後になるかも知れない」と語っている。Suchet といえば、2010 年 National Theatre の All My Sons で父親役を演じたときの強烈な印象をよく覚えているが、役柄はガラッと変わったものの、口やかましい Lady Bracknell を実に見事に演じていた。この劇の主人公は、あくまで、Wilde 自身が投影されている Algernon Moncrieffe である。彼と、のちに実の兄弟であることが判明する Jack Worthing とをめぐるエピソードと、彼ら二人のそれぞれの結婚譚を中心に劇は展開する。Lady Bracknell は第 2 幕にはほとんど登場しないものの、Suchet 演じる彼女がいったん舞台に登場するや、一気に舞台が盛り上がる。他の登場人物たちの影が薄くなってしまうほどに、Suchet の演技の力は大きい。イギリス特有のユーモアと機知にあふれた舞台を楽しんだ。それにしてもなぜ男優が Lady Bracknell を演じるのか。作中、Algernon が Bunbury に、Jack が Earnest に扮して、我が身を韜晦し人生を楽しんでいたように、舞台上では、Suchet が Lady Brackell に扮し、役者人生を楽しんでいるかのように見えた。

ストラットフォード・アポン・エイヴォンで観た RSC の二つの Shakespeare 劇では、Othello の方が面白かった。演出は、2012 年の World Shakespeare Festival への参加作品として、インドを舞台にした Much Ado about Nothing で RSC の演出デビューを果たした Iqbal Khan で、今年は Othello の演出で RSC に戻ってきた。この Othello では時代が現代に移され、二人の黒人、一人はガーナ生まれのベテランイギリス人俳優 Hugh Quarshie を Othello に、もう一人はジンバブエ生まれのイギリス人 Lucian Msamati を Iago に起用した。RSC で黒人が Iago を演じるのは今回が初めてである。Iago を黒人にすることで何が起きたか。Othello は、武勲ゆえに大きな尊敬を受けてはいるものの、黒人の雇われ将軍として、ベニスの白人社会からは疎外された人物である。Iago は黒人の軍人として白人中心の軍隊から疎外されている人物として描かれる。キプロス島に無事到着したあとの酒宴の席で、Iago は目に涙を浮かべながら故郷を想うかのように懐かしそうにアフリカ系の歌を歌う（原語で歌うので残念ながら歌詞は理解できなかった）が、歌の途中で仲間の白人の軍人たちに邪魔されて、歌は掻き消されてしまうという、テキストにはない場面が用意されている。Iago は軍の中で孤立している感が強い。白人たちから疎外されているという事実が二人を近づけることになる。Othello を陥れる Iago の姿には、近しいがゆえの反発というテーマが加えられている。Khan は、「嫉妬」がもたらす悲劇に「人種問題」を絡ませて、この作品に新しい光を当てようとしている。Iago が常に自分の手の汚れを気にしたり、服の乱れを気にしたりして、潔癖症の患者のようなしぐ

さを繰り返すのも、Iago に対する新しい解釈である。Royal Shakespeare Theatre の舞台は何も装置が用意されない裸舞台のことが多いが、この演出では、舞台中央に水が張ってあって、開幕時、Iago と Roderigo がゴンドラに乗って登場するときは、ベニスの運河として機能し、最終幕近く、Desdemona が Emilia と語りながら「柳のうた」を歌うときは、Othello の館のプール（Desdemona はプールの水の中に足を入れたまま歌う）として機能するといった工夫も施されている。

もう一つの Shakespeare 劇、Polly Findlay 演出の The Merchant of Venice には新しさは全くと言ってよいほどなかった。劇場に入ると、開幕 20 分前だというのに、舞台に一人の男が憂鬱そうな顔でじっと立ち尽くしている。もちろん Antonio である。劇が始まる前から彼のメランコリーが強調されているわけだが、どこかで観たことがあるような演出である。Antonio と Bassanio が明らかに同性愛の関係にあることが強調され、二人がキスをする様子を Portia が苦々しい表情で見つめる場面が用意されるが、これも容易に想定できる演出である。Bassanio をはじめ彼の仲間たちが Shylock に唾を吐きかける場面が何度もある。Shakespeare の時代では反ユダヤ主義として受け入れられたものの、現代の舞台では、観客は何度もこのような場面を見せられては、逆に、反ユダヤ主義に嫌悪を感じるであろうことは、演出家にははじめから分かり切ったことだ。反ユダヤ主義批判を前面に出そうとするならそうした演出もありうるだろうが、そのような強い主張がこの演出にあるわけでもない。舞台奥を全面ガラス張りにした舞台装置も蜷川のものだし、舞台右手に天井から球形の振り子がぶら下がっていて、Portia が揺らすと、振り子は劇が終わるまで揺れ続けるのも、何を表したいのかよく伝わってこない。加えて、RSC の公演では久しぶりに感じることだが、Shylock を演じたパレスチナの俳優 Makram J Khoury を除くと、出演者の演技が下手だと思った。Duke も女性俳優が演じていて、その意図が測り兼ねた。役者が不足しているのかもしれない。父親からの遺言とはいえ、おとぎ話のような「箱選び」のシーンを Portia はどのような思いで見守るのか、作中の反ユダヤ主義をどのように演じるのか、同性愛だと思われる恋人をいかに夫として迎え入れるのか。The Merchant of Venice を現代に上演する難しさを再確認した上演であった。

元 RSC の芸術監督 Trevor Nunn が自ら建設を指揮した Swan Theatre で Ben Jonson の Volpone を演出するために久しぶりに戻ってきたというのだから、大きな期待をもって劇場に向かった。Volpone（狐）はヴェニスの大金持ち。子供のいない彼は自分が選んだ人間を遺産相続人とすると宣言する。金の亡者 Volpone はさらに蓄財しようと、重病を装い、彼の歓心を買って相続人の指名を受けようとする強欲な男たち、弁護士の Voltore（禿鷹）、商人の Corvino（烏）、土地持ちの Corbaccio（大鴉）を誑かし、見舞いの金品を巻き上げる。そればかりか Corvino の美貌の妻を手に入れようとするが、失敗。死んだと見せかけてさらに金を手に入れようとするが、最後にはすべてが露見し、手先の Mosca（蠅）ともども処罰される。一種の「ドタバタ喜劇」と言ってよい。Nunn はまず、時代設定をコンピューターが支配する現代に変える。Jonson のテキストにも、手が加えられていて、劇中、「地球温暖化」や「ギリシャの財政破綻」が言及される。Volpone の屋敷への訪問者はモニターカメラで映し出され、部屋のなかのテロップにはその日の株価が流される。手下の Mosca は高級ホテルのコンシェルジェのように、Volpone の画策を手際よく処理していく。全体と

してはVolponeは現代の金儲けに邁進する経済人を彷彿とさせる。現代の時間の迅速さを象徴するかのように、Nunnはスピーディーに舞台を展開させていく。開幕直後、これまでにため込んだ財宝を目の前にして、金に対する讃歌を歌い上げるVolponeにはどこかThe Merchant of VeniceのShylockを思わせるところがあるが、そういえば、Volponeを演じるHenry GoodmanはNunnの演出で90年代にNational TheatreでShylockを演じたことがある。Shylockには観客からの同情が寄せられても、Volponeは弾劾されるべく弾劾される。コンピューターが支配する現代にあって、VolponeがCorvinoの妻Celiaに接近しようとして、大道売りに扮し、万能薬「蛇の油」を売ろうとするのは、何とも時代錯誤の感が拭えない。やはり、原作の時代設定を現代に移し変えようとすると何らかの齟齬が起きてしまう。Volponeの貪欲ぶりや、彼の遺産を狙う3人の愚かさがあまりに戯画化されていて、Jonsonの原作にあるモラリスティックな面が薄れて、エンターテインメントになってしまってはいるものの、GoodmanやMoscaを演じたアジア系役者Orion Leeの好演もあって、Nunnのスピード感あふれる演出を楽しむことができた。今夏ストラットフォード・アポン・エイボンで観た3つの公演の中では一番面白かった。

この夏London演劇界の一番の話題は、今イギリスで最も人気のある俳優Benedict Cumberbatchが主役を演じたSonia Friedman ProductionsのHamletであった。切符の入手は困難を極めた。公演当日の朝特別に発売される20枚の切符を求めて多くの、特に若者の、ファンがBarbican Theatreの切符売り場に並んだ。筆者もこの列に2度加わったが、残念ながら切符は手に入らなかった。列の先頭で寝袋にくるまっていた若者にいつから並んでいるのかと尋ねたところ、前日の夜7時からという答えが返ってきた。映画The Imitation GameやWar Horse、TVドラマSherlock Holmesで一躍スターダムにのし上がったCumberbatchのHamletを観ようと若者たちが押し寄せた。公演中も舞台に登場するCumberbatch の写真を撮ろうとカメラや携帯のシャッター音がひどかったという。公式の公演開始の前の、異例に長い17日間のプレヴューの段階から新聞各紙がこの公演を報道した。Hamletの第3独白が開幕冒頭で語られることが分かるや、各紙が非難を浴びせたために、テキスト通りの場所に戻すという騒動もあった。The Timesの劇評子は、「この公演は子供向けのものだ」と5つ星中、2つ星という低い評価を下していた。ただ多くの若者たちにShakespeareへの関心を抱かせるきっかけにはなったと思う。この公演はいずれ劇場で放映される予定ということなので、日本でも見られるかもしれない。

昨年夏のNational TheatreでのMedeaの成功のあと、ロンドンではギリシャ悲劇が数多く上演された。昨年末にはOld VicでElectra（10/1〜12/20）、2015年になってから、BarbicanでAntigone（3/6〜4/4）、AlmeidaでOresteia（6/5〜7/18）、Bakkhai（7/30〜9/19）、Medea（10/1〜11/14）、Shakespeare's GlobeでThe Oresteia（9/2〜10/16）、Trafalgar StudioでOresteia（9/7〜11/7）がそれぞれ上演された。上演期間にロンドンへ行かれなかったり、あるいは、ロンドン滞在中でも切符が入手できなかったりして、どれも観ることができなかったが、何故いまギリシャ悲劇なのかは考察を要すると思う。イギリス演劇の閉塞感を打破すべくギリシャ劇へと目を向け、演劇の根源に戻ろうとする動きなのかもしれない。（酒井　記）